環びわ湖大学・地域コンソーシアム

大学地域連携課題解決支援事業 2024 報告書（事業報告）

（最終報告書）

１．長浜市×長浜バイオ大学.....1

余呉の自然をもっと発信して，もっと繋がる～地域振興へ電子顕微鏡の挑戦

２．東近江市×びわこ学院大学.....5

地域の夏祭りを通した環境教育と地域コミュニティの維持

３．東近江市×びわこ学院大学.....9

博物館の収蔵資料･展示事業を子どもたちに役立てるための､学生参画と道徳科･社会科の地域教材作成

４．東近江市×びわこ学院大学.....13

誰もが使いやすい交通環境実現に向けたリ・デザイン

５．大津市×滋賀短期大学.....17

大津市無形民俗文化財「大津絵踊り」の３D デジタル化プロジェクト

６．東近江市×びわこリハビリテーション専門職大学.....21

山間部に暮らす高齢者と共に考える LIFE～健康いきいき作業療法プロジェクト～

７．東近江市×びわこリハビリテーション専門職大学.....25

いきいき生活プロジェクト 2024～体力チェックで健康寿命を延ばしましょう～

（１年目報告書）

８．草津市×滋賀大学.....29

ビワイチ「歩育」のススメ～幼稚園で、親子で楽しもう～

９．東近江市×滋賀大学.....33

「読んで」、「聴いて」、「話して」、広げる読書の魅力！

10．大津市×びわこ成蹊スポーツ大学.....37

1000 年の歴史、鮒漁への挑戦

11．滋賀県×びわこ成蹊スポーツ大学.....40

動作の客観評価がつなぐスポーツライフの探索・啓発的活動

12．大津市×びわこ成蹊スポーツ大学.....44

スポーツ施設・公園を活用した市民スポーツ実施、健康、防災意識の浸透研究

13．東近江市×龍谷大学.....47

広がる地域の輪～フットパスの可能性～

14．大津市×びわこ学院大学.....51

大学生に３つの授業実践力をつけるための子ども向け科学実験・ものづくり教室の取り組み

15．滋賀県×びわこ学院大学.....55

いのちの安全教育～Stop 性暴力・性犯罪

16．東近江市×びわこ学院大学.....59

スポーツ拠点を中心とした地域防災～みんなで考える地域の避難所運営～

17．東近江市×びわこ学院大学.....63

－ひきこもりや孤独死、育児ノイローゼから人々を救う－音楽セラピーとリクリエーションによる生涯教育と子育て支援

18．滋賀県×成安造形大学.....67

滋賀県 CO2 ネットゼロ社会づくりの推進をテーマにした児童向けワークショップデザインプロジェクト

19．大津市×成安造形大学.....70

幼稚園児との日用品を応用した造形あそびワークショップ

2024 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 1

プロジェクト名（活動テーマ）： 余呉の自然をもっと発信して，もっと繋がる～地域振興へ電子顕微鏡の挑戦 〔SDGs 目標番号：目標 4、目標 11、目標 15　　〕	
SDGs 目標：	
提案者	：奈良篤樹
自治体担当者	：伊藤真一
連携大学担当者	：熊崎厚作

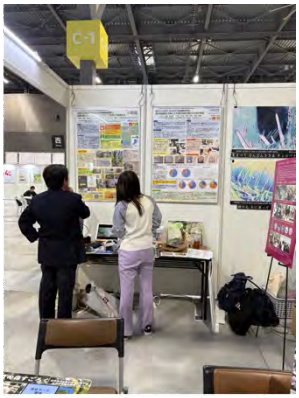
１．取組体制

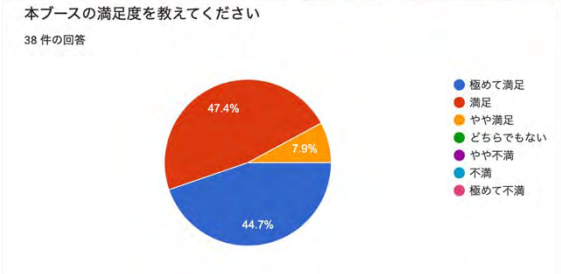
長浜バイオ大学・オルガネラ構造機能研究室：活動の統括と運営の全てを担当。
余呉小中学校：6 年生が試料散策と電子顕微鏡観察（大学にて実施），読み札作成（小中学校にて実施）の取組に参画。

自治体：ながはま森林マッチングセンターや長浜市地域おこし協力隊との協力で，余呉の森林散策ルート作成や提案する森林課題の設定をする。

２．背景・目的

余呉は，余呉湖や巨木などの自然と，菅原道真生誕の地など歴史が残る。しかし人口減少からこれらの維持と伝承が難しくなってきている。そこで地元愛の深い小学生を育てることを目指し，地元の森林を散策し，そこで得たサンプルの電子顕微鏡写真を SNS 発信しグッズを販売する。以上から地域振興の足がかりにする。





３．活動内容

(1)SDGs Aichi EXPO への出展・参加による，電子顕微鏡と俳句の実践の発信(10/5-8 実施，愛知県常滑市)

[活動内容] これまで行ってきた電子顕微鏡と俳句の，余呉小中学校の 6 年生との取り組みを内外に発信することを目的に， SDGs Aichi EXPO への出展・参加を行った。出展内容の満足度は非常に高く，アンケート回答者の 92.1%が本出展ブース内容に満足していた。電子顕微鏡の理系科目と，俳句の文系科目の異色のコラボレーションに驚き

を示す参加者もいて認知度が低いことから,斬新な取り組みをさらに進めて発信していく必要があると感じた。

(2)余呉の自然を利用した電子顕微鏡観察と俳句の作成

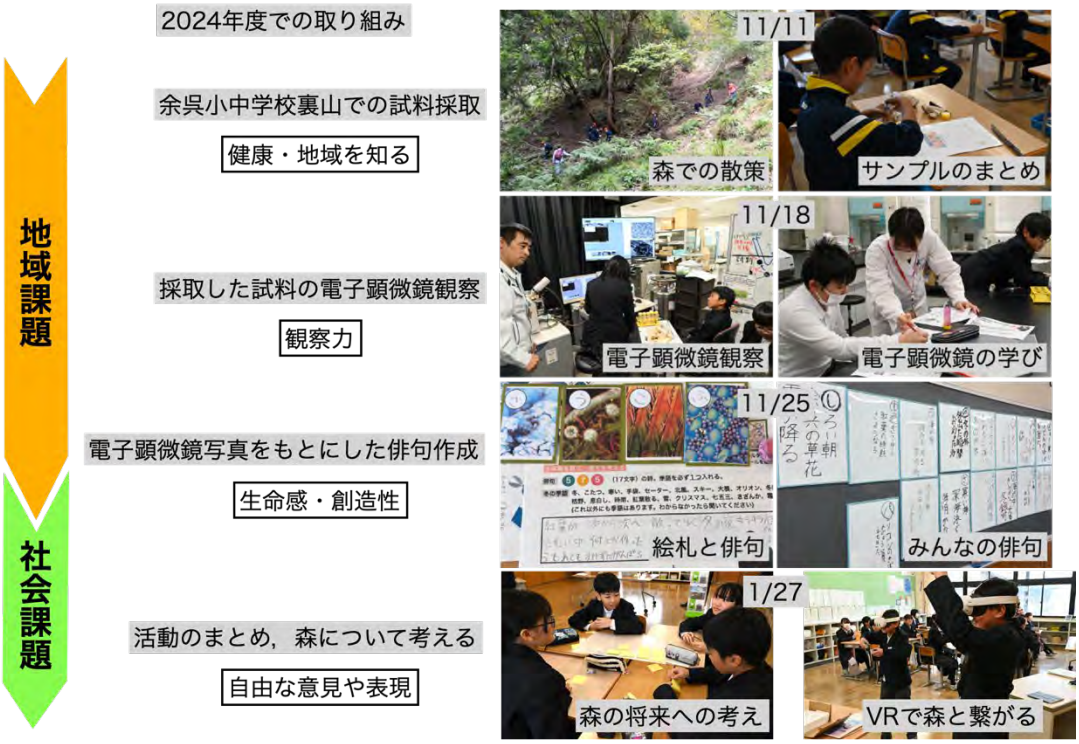
[活動内容] 余呉小中学校の 6 年生を対象に，本学設置の走査型電子顕微鏡(日立 S-3400N)の操作体験を行った。

（試料のサンプリング[11/11 実施]）森林について理解を深めるために，余呉小中学校の裏山に生徒と歩いて落ちているものを拾い，電子顕微鏡観察サンプルとした。長浜地域おこし協力隊との連携で，様々な森のものをサンプリングでき，学びが多かったと考える。

（電子顕微鏡観察[11/18 実施]）走査型電子顕微鏡を生徒自身が操作をし，写真を得ることができた。生徒には事前学習として電子顕微鏡にまつわる基礎知識となるプリントを配布し，電子顕微鏡がどのような機器であるのかを学ぶ機会を与えた。

（電子顕微鏡写真を用いた俳句の作成[11/25 実施]）得られた電子顕微鏡写真を絵札とし、かるたの読み札を俳句で作る授業を行った。数種類ある電子顕微鏡写真シールの中から 1 枚選び、夏の季語をテーマに俳句作りをした。その後かるた台紙にシールを貼り、俳句の清書を行った。

（活動についてのまとめ，森について考える[1/27 実施]）3 回実施したワークを統合し活動をまとめる目的で，10 年後の森について生徒に考えてもらった。活動を通して森に対するイメージの移り変わりや，将来の森との関わりなどについて，付箋に意見を書いてもらった。得られた付箋を Miro App で共有することで，故郷の豊かな森に対する考えを醸成した。



４．目的の達成状況、成果

そこで地元愛の深い小学生を育てることを目指し，地元の森林を散策し，電子顕微鏡で森林のミクロの世界を体験した。俳句やVRを通して森の価値を考えることができた。「森で働く」ことや「森でのイベント開催」を考えるような付箋も見られたことから，地元愛を滋養できていると考える。電子顕微鏡観察した画像を印字したアクリルグッズを作ることができ，森を題材にした新しい一歩になったと考える。VRは，次世代型の森との繋がりの可能性の一つとして体験してもらった。生徒が成長した時に，地元の豊かな森とどう向き合うかといった問題解決のツールになる可能性がある。以上の成果は，中日新聞2025年1月29日朝刊に掲載された。

長浜バイオ大・奈良准教授　余呉小中6年生に授業

身近な森に思い巡らす

長浜市の余呉小中学校で27日、長浜バイオ大の奈良篤樹准教授による6年生向けの授業があった。奈良准教授は2022年度から、自然素材の顕微鏡写真に着色を施したアート作品をお題にした俳句教室を開催。3年目の24年度は、これまでの学校周辺の森散策、電子顕微鏡体験、俳句作りに加えて、児童たちに古里の豊かな森について考えてもらう内容にした。（松本芳孝）

6年生15人は4班に分かれて森の良いところ、悪いところ、10年後にどうなっているか、森とどうつながるかについて自身の考えを書き出していった。

良いところは「酸素を出し、二酸化炭素を減らす」「空気がおいしい」「動植物が多い」などだった。悪いところは「山火事」「土砂崩れ」「危険な動植物がいる」「手入れをしないと危ない」などの意見があった。

10年後は「変わらない」「木が増える」「なくなっている」とイメージが湧かない様子だった。森との関わりでは「森のゲームを作る」「森でイベントを開く」「森を守る仕事をする」などが挙がった。

仮想現実（VR）で市内の森の疑似体験もした。児童たちは専用のゴーグルを着け、自身を中心に360度広がる空間に驚きの声を上げた。

授業に先立ち、奈良准教授が電子顕微鏡アートのキーホルダー、アクリルスタンドが入ったカプセル玩具を児童にプレゼントした。

「3年間やってようやく歩みを進められた。25年度は電子顕微鏡アートを絵札に、児童の俳句を読み札にしたかるたを完成させたい」と話した。

授業は23、24年度、一般社団法人環びわ湖大学・地域コンソーシアムの助成を受けた。

森の良いところを考え、付箋に書き出す児童と奈良准教授（中央）＝いずれも長浜市の余呉小中で

市内の森をVRゴーグルで疑似体験する児童

25年（令和7年）1月29日（水曜日）　☆くらし　14

中日新聞

生鮮食品市況　28日（

大津	⑲	1404	108
コンブ	⑲	2538	
イカ	⑮	2700	
ハクサイ	⑲	2592	
キャベツ	⑲	130	
ホウレンソウ	⑫	140	
コマツナ	⑮	259	
ネギ	⑮	130	
シュンギク	⑥	3780	
ブロッコリー	⑩	4104	
レタス	⑮	1944	
サニーレタス	⑮	3024	
キュウリ			

５．課題、懸案事項

本取り組みは，散策した地元の森のものを電子顕微鏡で観察し，得られた画像を利用して俳句を詠んだりアクリルグッズにしたり，VRにしたりした。これらのイベントを通して森について再考し思い巡らす取り組みは，初めてであったが，生徒に大きな印象を与えたと考えている。新聞紙上に取り上げていただいたこともあって注目度も高く，この取り組みをどう継続させていくかが課題となる。環びわ湖大学地域コンソーシアムによって本取り組みに価値があると評価していただいたことは有り難い。が，人口減によって地域環境の

課題の解決が難しくなってきている大きな社会課題に立ち向かうことをコンソーシアム自体も成果として発信していく必要があろう。SDGs Aichi EXPO での成果発表に対する反響(92%が満足)もあり，本取り組みをさらに継続させて発信していく必要がある。

2024 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 2

プロジェクト名（活動テーマ）： 地域の夏祭りを通した環境教育と地域コミュニティーの維持	
SDGs 目標：	
提案者	：びわこ学院大学　学長　沖田行司
自治体担当者	：東近江市役所湖東支所　川越慶弘
連携大学担当者	：びわこ学院大学　地域・産学連携研究支援課　課長　岡崎孝文

１．取組体制

・びわこ学院大学和田健一ゼミにおいて、造形表現を研究主題とする３回生５名を中心に、親子でつくる「造形ワークショップ」を企画・運営する。指導教員監督の下、ワークショップで製作する題材設定並びに製作手順、当日の運営まで全てを学生が担う。

・ことう夏祭り実行委員会・東近江市役所湖東支所と連携しながらワークショップ当日の運営を行う。

２．背景・目的

地域住民の方々に、再生可能エネルギーや地域環境への関心を深めていただくことを主とした目的に据え開催されてきた、コトナリエでのイルミネーションづくり（本学学生が主体となりイルミネーションづくりワークショップを行ってきた）は、コトナリエの終了とともに 2023 年度をもって一旦終了した。コトナリエの意志を受け継ぎ、新たに旧湖東町夏祭り「ことぼん 2024」が開催されることになり、「造形ワークショップ」としてこれまでとは形を変え開催することとなった。

幼児、児童とその保護者を交えた親子活動として実施するものであるが、親子のふれあいや、参加される多数のご家族同士のふれあいを主要なテーマとしている。また、活動を通して、地域の人と人とのつながりや、製作材料に廃品を利用することなどから、コトナリエの時と同様に地域環境への関心など深めていただければとの願いを込めている。

保育や教育を学ぶ本学学生にとってこのワークショップは、単なるワークショップの開催だけでなく、子どもの発達段階を踏まえた題材設定や、材料の調達から製作手順の検討、

当日の運営までの全てを自分たちで行うことを通して、実践的な学びを得るまたとない機会であり、得る物の非常に多い活動である。また、学生自らがエネルギー資源や環境について考える良い機会でもあると言える。

３．活動内容

（１）「造形ワークショップ」題材検討、試作品製作など。

① ４月のゼミ活動開始とともに、夏祭りにふさわしく人と人をつなぎ、さらに廃品を利用した題材の検討を始めた。

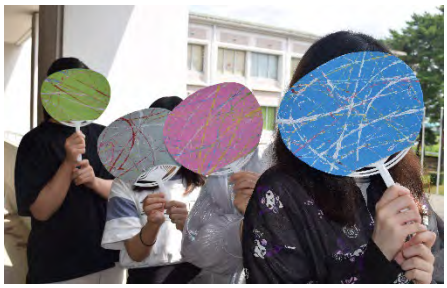
同時に、ワークショップ会場やそれに伴う来客者（ワークショップ参加者）数などの調整を、ことう夏祭り実行委員会との間で行う。

② 5 月～題材候補作品の試作品製作を開始する。

候補作品を数点に絞った上で、試作品を製作しそれぞれの問題点を検討しながら、最終的にワークショップで製作する作品を「廃品を利用した団扇」「フォトフレーム」の 2 点に決定する。題材決定後、学生が中心となり材料調達や当日の活動計画を立案していく。

③ 7 月 17 日（火）ワークショップ会場である、ひばり公園 みすまの館を下見。
会場下見を行い、ワークショップ可能参加者数、机の数量・配置、水道設備など、活動に必要な施設・設備などの確認を行う。

④ 試作の継続と案内版やチラシの製作。



1. 試作した団扇

2. フォトフレームの試作

3. フォトフレームの試作

4. 参加募集チラシ

5. 案内看板の製作と設置

（2）「造形ワークショップ」当日（2024 年 8 月 11 日、日曜日）

① 東近江市池庄町ひばり公園内みすまの館において、「造形ワークショップ」を開催する。ワークショップ会場は比較的小さな研修室であるため大人数での活動は難しく、参加者数を最大 15 組 40 名と設定し、11 日午後～ひばり公園内で参加者募集のためのチラシを配付することにした。

② 夏祭りは夕方からであるが、午後になりちらほらと公園内には子ども連れのご家族の姿が見られるようになり、日中の強烈な暑さの中、13:00 頃から来園者にチラシ配りを始めた。興味をもっていただいたのか、「後で行ってみよう・・」などご家族の会話も聞こえてくる。

会場準備も万端。

6. 準備万端整った会場の研修室

③定刻の 15:00 になり「造形ワークショップ」開会。

7. ワークショップ風景

全体への説明の後、それぞれご家族ごとに製作活動に入る。各テーブルには学生が付き、

細かな手順や製作についてのアドバイスを行いながら進めていく。

同じテーブルの中や、隣り合わせたテーブルの子どもたち・保護者の方々の間では会話も交わされ和やかな雰囲気の中でワークショップが進行していった。

8. 親子で和気あいあいと

今回、廃品を含む（団扇の骨組み部分など）製作のための材料は主に大学側で用意したが、他に使い道のなかったものを有効利用できたと考えている。ただ、地域の各ご家庭へのお知らせを早い時期から行うことが出来れば、製作材料の一部をご持参いただき作品製作することで、地域の環境についてもう少し踏み込んだ会話も交わせたであろうし、こちらからの投げかけにより、ご家族同士で地域環境について考えていただく・話し合っていただく場や時間も設定できたのではないかなど、学生たちにとって大切な気づきが得られた。

約 1 時間の製作時間の後、出来たばかりの団扇を持って浴衣姿でお祭りにくり出す親子連れの姿は微笑ましく、この日ご家族で撮った記念の写真をフォトフレームに入れ、夏の日の家族の想い出にしていただければうれしい。

４．目的の達成状況、成果

昨年度 20 周年を一区切りにその活動を終えた「コトナリエ」において、10 年以上に渡り「イルミネーションづくりワークショップ」を開催してきた。「コトナリエ」終了とともに学生によるワークショップも一旦終了としたが、本学学生にとっての教育的な効果も大きく、活動を通じて多くのことを学ばせていただいた。このまま活動を終えてしまうのではなく、何かしらの形で継続できないかと実行委員会の方々とも相談の上、「造形ワークショップ」として形を変え開催することになった。

これまでのイルミネーションづくりとは違い、「何をつくるのか？」というところから始めなくてはいけなかった上に、会場となる研修室もこれまでの大研修室の⅙程度となり、募集人数や設備の問題から出来ることの制限があり題材決定に多くの時間を費やした。
決定後は順調に試作を繰り返しながら本番に備え計画を進めていくことが出来た。

ワークショップ当日、小さな研修室ではあったが 15 組 36 名の親子連れにご参加いただき、和やかな雰囲気で「造形ワークショップ」を開催。終了後には完成した「ビー玉でコロコロして出来た不思議な模様の団扇」を持って、夏祭り「ことぼん 2024」会場へ出かける親子の姿が見られた。

初対面のご家族同士が言葉を交わしながら廃品を利用した作品製作をすることで、多少なりとも「地域の環境を考える・地域コミュニティーの維持」に関わることが出来るのではないか？小さなことかもしれないが、こうした活動の積み重ねが、やがては一つの大きなうねりになることを期待して、今私たちに出来ることを一つずつやっていこうと思う。

9. 完成したフォトフレーム
と団扇を持つ兄妹

５．課題、懸案事項

表現に関わる活動は、目に見える形や数値でその結果というものは現れないことが多い。
かと言って不要なものでは決してなく、人が人として心豊かに穏やかに暮らしていくため
に必要不可欠なものである。

地域行事であるコトナリエやことぼん 2024 実行委員会などとの、永年に渡り培ってきたつながりの中、造形活動を中心に据えながら少しでも貢献できればとこれまで取り組んできた。結果として、周辺地域ではそれなりに認知もされ、ワークショップの継続を望む声もいくつか聞いている。「環びわ湖大学・地域コンソーシアム大学地域連携課題解決支援事業」としての取り組みは今年度をもって終了となるが、今後も、これまでのつながりを大切にしながら、やはり私たちに出来ること、表現の活動・作品づくりを通じて地域の中で何が出来るかを考えたい。そうして、前述した通り劇的に何かが変わる、変わったということはなくとも、このような活動を一つ一つ積み重ねながら地域と関わっていきたいと思う。

2024 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 3

プロジェクト名（活動テーマ）：博物館の収蔵資料・展示事業を子どもたちに役立てるための、学生参画と道徳科・社会科の地域教材作成	
SDGs 目標：	
提案者	：びわこ学院大学　学長　沖田　行司
自治体担当者	：東近江市近江商人博物館　館長　上平　千恵
連携大学担当者	：教育福祉学部准教授　和田　充弘

１．取組体制

びわこ学院大学（准教授和田充弘、和田充弘研究室）は、本事業の計画・実行、それに関わる主たる学生指導をつかさどり、博物館との連携に携わる。東近江市の博物館は、本事業の遂行、特に学生活動にその機会を提供し、専門的な見地から指導、助言を行う。

２．背景・目的

令和 5 年 7、8 月、東近江市近江商人博物館の夏季企画展にて、学生作成のイラストを提供した。同展の図録兼地域教材（小学校高学年と中学生対象）を令和 5 年度末までに作成し、市内の小中学校、博物館、図書館などに配布した。令和 6 年度には、当初、常設展に学生参画の対象を広げ、より平易な地域教材（小学校全学年対象）の作成と配布を計画していた。しかしこれを変更し、上記図録兼地域教材でも取り上げた資料をあらためて重点的に使用し、小中学生を対象とする道徳科の地域教材を作成し、配布することにした。

３．活動内容

びわこ学院大学教員（教育学、教育史専攻）の指導のもと、同大学のゼミ生と教職課程履修学生が、①東近江市の博物館（東近江市近江商人博物館ほか）の年間計画に従い、常設展のワークシートを作成するなど、展示、解説、広報の補助に携わる。②博物館の館蔵資料、展示事業、地域教育史関連の文献を活用して、教育史全般に関するより平易な地域教材の研究・作成を行い、その成果を冊子にまとめ関連諸施設に配布し、WEB 上で公開する。ただし当初予定していた上記 2 項目のうち、後者のみに絞ることにした。

４．目的の達成状況、成果

令和 5 年度に作成・配布できた図録兼地域教材『学びのふるさとを寺子屋にたずねて―東近江市近江商人博物館における夏季企画展の共催をもとに―』については以下のとおりである。B5 判でオールカラー、全 20 ページ。導入部では教材としての性格に絞り、見開きで合計 4 ページ、「考えてみよう！調べてみよう！」「寺子屋のことがわかる Q&A」を設けた。それに続けて 7 つの「展示室」を並べたが、こちらでは夏季企画展の展示を再現し、

その図録を収めることに力を注いだ。「展示室」では実際に使用したパネル、キャプションに修正を加えて掲載し、効果的な説明を新規に挿入し、展示資料の大半を写真で紹介することにした。2 月末日までに 150 部の完成品が印刷・製本業者から届き、東近江市内の小・中学校、図書館、博物館を中心に寄贈することができた。配送のさい、PDF の全冊データを収めた CD-ROM を同封した。別途、WEB での公開については、びわこ学院大学和田充弘研究室のホームページを開設し、そこで閲覧とダウンロードができるようにしておいた（https://sites.google.com/view/biwada/）。今後は実際に学校や社会教育施設で教材として使用していただくことに重点を移す一方、増刷とより広い対象への配布も検討している。作成にあたっての留意点をまとめておくと、①主に小学校高学年、中学生対象の地域教材としての使用を想定し、小学校 5 年生以上の配当漢字、常用漢字、歴史に関する専門用語にはルビを付けた。②地域教材と図録という 2 つの要素で構成したが、行き過ぎた平易化、簡略化は行わず、あえて詳しく高度な表現と内容も残すことにし、博物館の展示図録として、教育史研究の資料として、一定の水準を維持できるようにした。③近世の寺子屋について、近代学校教育に連続するものではなく、むしろ異質であることを強調した。教員も児童・生徒も、大人も子どもも、過去の学びを知ることを通じて、自身の学びをとらえ直す機会となることが作成者としての願いである。④広く市民を読者・使用者と想定した場合、当地の寺子屋が近江商人を輩出した点はできるだけ控え、全国に共通する寺子屋の、詳細で特筆すべき一事例であることを強調し、寺子屋に関する教育史的な教養の獲得に貢献できるようにした。

令和 6 年度には、『「特別の教科　道徳」地域教材　寺子屋における道徳の学び　近江五個荘　時習斎の教訓状から』を作成することができた。これについては B5 判でオールカラー、全 10 ページ。寺子屋時習斎の必修教材（習字用の手本）として実際に使用されていた『教訓状』『女子教訓状』を主な内容とし、それらの本文をわかりやすく現代語訳したものを計 6 ページにわたって掲げ、それに道徳教育の観点からの小中学生向けの「まとめ」と、資料としての原文の書き下しとを付け加えた。現代語訳では全ての漢字にふりがなを付け、「まとめ」では現代の道徳教育とは異なる特徴を 3 点に分けて説明し、原文の書き下しでは男女で表現の異なる箇所を赤字で強調した。今回も教員が原案を作成したうえで、学生たちはイラストと、教材化に際して配慮すべき点を中心とする加筆修正とを担当した。本冊子についても、東近江市内の小中学校、図書館、博物館に配布する予定である。WEB での公開は前年度と同じ方法ですでに実施済みである。

なお、今年度には、前年度に作成した図録兼地域教材を計 80 部、増刷することができた。こちらも関係諸施設への配布を実行中である。

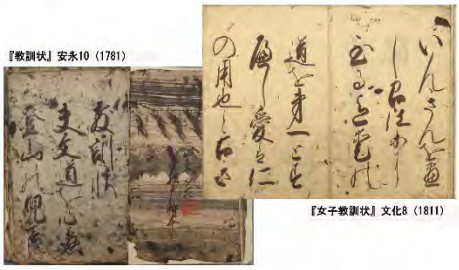
５．課題、懸案事項

2 年間、事業を実施してきたが、歴史学や社会科、地歴公民科を主専攻としない学生にとっては、難易度が非常に高かったことが最大の難点であった。本来なら資料の選定・解釈、教材化といった主作業に従事させなければならなかったが、それがほとんどできなかった。新年度は本事業への応募は控えておくが、博物館と連携したゼミ活動自体は継続していくつもりである。今後、今回とは異なる形での地域貢献活動ができるよう、学生、教員とも精進を重ねていきたい。

「特別の教科 道徳」地域教材

寺子屋における道徳の学び

近江五個荘 時習斎の教訓状から



『教訓状』安永10（1781）

『女子教訓状』文化8（1811）

東近江市近江商人博物館所蔵資料を活用して

小さな大学で 大きく学ぶ
びわこ学院大学
びわこ学院大学短期大学部

教訓状（男子用）

文道を、つまり書物を学び、さまざまな習いごとを身につけながら、人として進むべき道のことを心がけ、そのために初めて入学しようとしている子どもたちが気をつけなければならない大切なこととして、まず師匠、つまり先生の教えに背くようなことがあってはなりません。

そこで師匠から教えられ言い聞かされている、人として正しく生きていくためのすじみちを守りながら、手習い、つまり筆と墨を使い文字の書き方を習うときには、他のことに気を取られず、そのことにだけ心を使って、手本に書かれている筆の勢いや力の用い方までも注意深く観察し、筆をもつ手元は静かに落ち着かせ、習うようにしてください。

急いで書くことや、珍しく変わった書き方をまわりに見せつけるようなことは、好きになってはいけません。ここまでに示したことが、寺子屋で学んでいくうえで最初に心にとめておくべき、重要なことがらなのです。

しかし、このような大切な教えに従わず、師匠の教えに対していうことを聞かず、風雅な、つまりみやびやかなものでもある手習いの道を好きになることができず、寺子屋から逃げ去るように家に帰ってからも、親の前では悪知恵を働かせ、うそをついて言いのがれ、よくない遊びごとを楽しみ、うす暗くぼんやりと日を過ごし、

たまには寺子屋に出かけたとしても、机に寄りかかっているばかりで、手習いのための手本や、それを数枚の紙にとじ合わせた草紙を正しく置かず脇にしりぞけ、間違ったところを開いたままにして投げ捨て、左右の席に座っている友だちに向かっては、聞かれてもいないのに無駄なことを話しかけるばかりで、

めずらしく筆を取ったとしても、投げやりで浮わつき、ただ書き散らしているばかりで、少しも心が入らず、落ち着きがないために、自分よりも後から入門してくる者に遅れを取ることになり、そのことが不愉快でいっそう怠けてしまうのです。

そこで師匠は、たいそうきびしく叱りますが、つね日ごろから手習いに慣れていないため、筆を動かす手つきはよそよそしく、書こうとする動作が止まってしまい、前に習った字をひとつも読むことができません。

また、友だちや寺子屋で学びあう仲間に対しては、いんぎんに、つまり親しく、ていねいに、礼儀ただしく受け答えをし、少しでも年上になれば、年下の人や、後から入ってきた人を愛してかわいがり、ささいなことであろうと冗談や言い争いをしてはいけません。

そして寺子屋での生活とは別に、自分の住まいに帰ってからも、親ときょうだいだけではなく、同じ家の中で働き、暮らしている全ての人々に対しても、いんぎんであることに心を尽くし、お茶のお世話、お酒の注ぎ方、さかずきの上げ下ろしの形、座席での立ち居振る舞い、言葉づかいなど、いずれもよく習い、

たとえ窮屈で心と体がしばりつけられるように感じたとしても、幼いうちは朝から夕方まで、日ごろの行儀作法については、花奢に、つまり上品で優雅で、やさしく美しくあるように気をつけてください。

こうしたことを幼いときに学んでおかないと、生まれてから死ぬまでの人生は、つねに空しく、たしかな内容を持てないままで終わってしまうに違いないでしょう。だからこそ人は子どものときから、わずかな時間であっても注意をおこたることなく、学びに励むべきなのです。

恥じる心に強く訴えかけても、逆にあざむき悪口を言い返し、自分の落ち度をかえりみず、無理矢理に他人の欠点を責め立てるばかりで、

心がけが良くてまじめに習う子どもを見つけると、そのことを悪く言い、ねたみ、笑いあざけり、ほかの子どもを困らせ、けんかと言い争いを好み、

まわりに人がいることを無視するように勝手気ままで、長所がどこにも見つからない大人になってしまっては、

さらに年を取り老人になったとき、どのような場所に身を置いても恥ずかしい思いをし、かえって親を恨み、他人に責任を押しつけ、人生のどれもこれも、後悔するだけで終わってしまうのです。

だからこそ、よく考えてみてください。親の立場にある者としては、身分や地位の違いとは関係なく、我が子のことを大切に思う恩と徳、つまり親として親切に世話をやき、人として尊い行いをしようとする心の深さを、もともと共通して持っているのです。

子どもが生まれたときからずっと、数えきれないほどの辛さと苦労を尽くして、養ない育てることにつとめ、より大事に愛し続けた結果、人としてのあるべき道を知ってもらいたいために、都合よく寺子屋の師匠に入門させることができたとしても、子ども自身が手習いに無器用で人の道に外れるようでは、用紙と墨、筆をむだに使うだけになってしまうでしょう。

ひとつの文字を知ることもなく、一生をむなしく暮らすとなると残念でなりません。これでは冥加、つまり神さまや仏さまからいただけるありがたい恵みも絶たれてしまい、まことに恐ろしいことになってしまうのです。

女子教訓状（一部のみ）

そして寺子屋での生活とは別に、自分の住まいに帰ってからも、親ときょうだいだけではなく、同じ家の中で働き、暮らしている全ての人々に対しても、いんぎんであることに心を尽くし、こまごまとした用事をしてもらっている召使いなどにも行き渡るように、愛の道を第一に考えて下さい。

愛とは、人がもともと心の内側に持っている仁というすぐれた道徳が、実際の生活の中で考えたり感じたりするときに、おもてに現れた働きであると、古い書物に書かれています。だからこそ女性は特に、愛の道について気をつけなければならないのです。

一方で、当然のことですが、裁縫をはじめとする女芸、つまり女性として身につけておくべき技術について、その大切さは言うまでもありません。

また女性は常に、三従の道というものを守らねばならないと聞いています。(一) 生まれ育った家では父母に従い、(二) よそに嫁いでからは夫に従い、もしもの場合、(三) 夫が亡くなった後は自分が産んだ息子に従うという教えについても、気をつけないといけないのです。

いまの おしえでは ありません

まとめ

滋賀県東近江市には、五個荘と呼ばれるところがあります。そこでは江戸時代に、子どもたちが手習いを学ぶために、いくつものすぐれた寺子屋が作られていました。ここまで取り上げてきた文章は、そうした寺子屋で実際に使われていたお手本のうち、とくに道徳について書かれているものを選び、わかりやすく説明したものです。

そこでは第一に、寺子屋で正しく学ぶこと自体が、道徳として重んじられていました。子どもたちには、静かに、落ち着いて、しっかりと手習いに集中することが求められていたのです。

第二に、正しく学ぶことは、まわりの人に対して、愛情をこめて、親しく、ていねいに、礼儀正しく接することと関係していました。寺子屋にいるときも、家に帰ってからも、言葉づかいと行儀作法に気をつけないといけませんでした。

たとえ窮屈であっても、上品で、やさしく、美しく、きちんとした形どおりの行儀作法が身につくように、子どもの時からしつけられていたのです。女性の長所に触れる一方、差別的な考えもみられました。

第三に、毎日の生活のなかで、正しく学び、人と接することは、人間としてよりよく生きていくことにつながりました。学問をおさめ、人としての道を踏み外さないことが、すべての人々に共通する、人生の尊い目的だったのです。

2024 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 4

プロジェクト名（活動テーマ）： 誰もが使いやすい交通環境実現に向けたリ・デザイン	
SDGs 目標：	
提案者	：東近江市都市整備部公共交通政策課　管理監　山本　享志
自治体担当者	：東近江市都市整備部公共交通政策課　主査　加藤　洋大
連携大学担当者	：びわこ学院大学教育福祉学部　逢 軍（パン　ジュィン）

１．取組体制

・びわこ学院大学

調査、研究設計、フィールドワーク、聞き取り調査実施、結果の取りまとめ、データ分析

・東近江市都市整備部公共交通政策課

調査、研究設計、地域交通に関する基礎データの提供及び地域住民組織との調整役、調査協力、データ分析

２．背景・目的

東近江市では、市の最上位計画である「東近江市総合計画」において、「公共交通の維持・充実を図り、便利で満足度の高いまちを目指す」という目標を掲げている。この目標を具現化するためのマスタープランとして「東近江市地域公共交通計画」を令和４年３月に策定し、令和 13 年度までの 10 年間で取組むべき具体的な施策を掲げて取組を開始したところである。

東近江市では、来るべき超高齢社会を踏まえて、高齢者をはじめとする交通弱者や増加する在住外国人等にとって分かりやすく、使いやすい公共交通利用環境の整備が求められている。
本研究では、路線バス・コミュニティバス（ちょこっとバス、ちょこっとタクシー）といった地域公共交通に着目し、誰もが使いやすい公共交通利用環境の整備を目指し、「①路線バス・コミュニティバス（ちょこっとバス、ちょこっとタクシー）の停留所のリ・デザイン」、「②ちょこっとタクシー停留所の配置基準の見直し」について研究するものである。

３．活動内容

本プロジェクトは、ちょこっとバス、ちょこっとタクシー、近江バスが運行している愛東地区において調査を行った。令和５年度では、事前研修、３回のフィールードワーク、ワークショップ、愛東地区の高齢者を対象にちょこっとバス・ちょこっとタクシーの利用や停留所の時刻表の見やすさなどについて、アンケート調査を実施した。

<u>令和５年６月 28 日　第１回ミーティング</u>

大学にて、自治体担当者が学生に対して、地域公共交通の現状、調査研究概要の説明を行い、今後の研究計画を確認した。

令和５年７月 26 日　事前研修

びわこ学院大学短期大学健康福祉コースの山ノ井講師（専門：社会福祉学、介護福祉学）より「高齢者の生活と特徴」についての講義をしていただいた。また、高齢者キットを装着し、高齢者の歩行ではどのような苦労があるのか、などを体感した。講義および疑似体験を通して、交通弱者と言われる高齢者に対して、どのような点について留意すべきかを学ぶことができた。

併せて、今後のフィールドワーク予定地域について検討し、ちょこっとバス、ちょこっとタクシー、近江バスを運行している愛東地区にてフィールドワークを実施することとした。

令和５年８月 28 日　第一回フィールドワーク

事前研修をした後、実際にちょこっとタクシー、ちょこっとバス愛東線に乗車し、各停留所の配置場所を確認し、11 月に行うフィールドワークに向けて、重点的に確認すべき箇所などを確認した。

令和５年 10 月 18 日　ワークショップ

第一回フィールドワークのワークシートの結果を踏まえ、第二回フィールドワークでの重点調査項目等について整理を行った。

令和５年 11 月８日　第二回フィールドワーク

10 月のワークショップで整理した調査項目に基づき、愛東地区内の各停留所の状況について二班に分かれて調査を実施した。一つの班はバスに乗って体験をし、もう一つの班は車で一つ一つのバス停の現状と配置状況などを確認した。

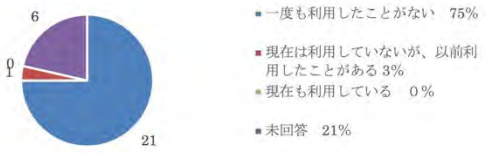
令和５年 11 月 16 日　アンケート調査

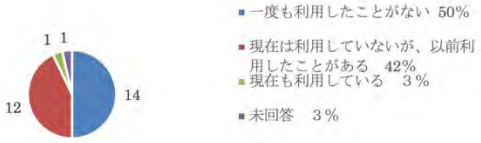
停留所のデザインや配置基準の参考とするため、愛東地区のほがらか学級で高齢者（80 歳前後）を対象に、ちょこっとバス・ちょこっとタクシーの利用や停留所の時刻表の見やすさなどについてアンケート調査を実施し、28 名の回答が得られた。

また、３回のフィールドワークとワークショップを通して、各停留所の配置場所やデザインなどの問題点を把握することができた。また、調査結果から見れば、現在ちょこっとバスを利用している人は 3%で、ちょこっとタクシーを利用している人は 0%である。

以下は調査結果の一部を抜粋したものである。ちょこっとバスとちょこっとタクシーの利用状況は下記の通りである。

Ｑ１：ちょこっとバスを利用したことはありますか？　Ｑ２：ちょこっとタクシーを利用したことはありますか？





上記の結果から見てわかるように、現在、ちょこっとバスとちょこっとタクシーの高齢者の利用者数は極めて少ない。

したがって、令和５年度の調査結果を踏まえて、高齢者も利用しやすいように、令和６年度は

さらにフィールドワーク調査をし、具体的な配置場所やデザインを検討した。

令和６年 10 月 30 日夕方

停留所の見やすさを中心にフィールドワークを実施した。

令和６年 11 月 19 日

市役所の担当者と学生たちと一緒にワークショップを実施、停留所の具体的なデザイン方針を検討した。

以上のフィールドワークより、停留所標識のデザインが統一されていないなどの課題があることが明らかになった。また、バス停の標識が片側１か所にしかない箇所もあったが、それは道路事情など様々な要因があることが判明、統一したデザインに整理しつつも、道路状況に合わせた標識を作成する必要があることが明らかになった。

その後、学生たちと担当者が具体的なデザイン案を検討し、素案を市役所担当者に提出、市の担当者からアドバイスをいただいた。

山ノ井先生による講習会

高齢者キットで体験

ワークショップの様子

令和６年 10 月 30 日フィールドワークの様子

令和６年 11 月 19 日ワークショップの様子

４．目的の達成状況、成果

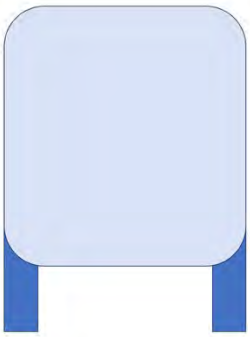
令和５年度及び令和６年度のフィールドワークを実施し、バス運営主体毎に停留所標識があり、例え同じ場所の停留所でも名称が異なるなどの課題があることが分かった。市からは、過去のアンケート調査において、ちょこっとバス・タクシーの存在については認知されているが、停留所の位置など利用するために必要な認知度を高めていく必要があるとの指摘があった。したがって、停留所の名称や停留所標識のデザインを統一するとともに、人々にバス停留所の認知度を高めていく必要がある。

なお、停留所標識については、道路事情等の理由により片側１か所にしか停留所標識がない地域もあり、道路状況に合わせた標識を作成する必要があることが分かった。

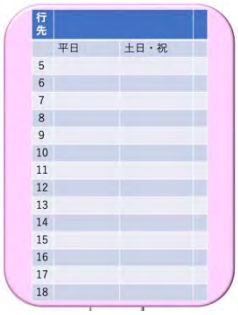
これらを踏まえ、停留所のデザインは、①近江鉄道八日市駅をはじめとする交通結節点や乗降

客の多い場所に設置する標識、②道路沿いに設置する標識、③標識設置に制約が多い場所に適した標識といったように、地理的要因等を整理しつつ、統一的にデザインされた停留所のデザインを検討してきた。具体案のイメージ図は次の通りである。

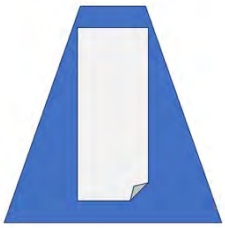
① 八日市駅をはじめとする交通結節点や乗降客の多い場所
近江鉄道バスとの差別化し、多くの線で利用されるため、多くの情報を見やすくする工夫
→カラーリング



② 道路沿い
自然に同化してしまわない色味かつ安全であることがアピールできる



③ 設置する環境に制限のある場所
三角錐パイロン等狭い範囲で必要な情報を見やすく載せる → 多面体



５．課題、懸案事項

今後、標識を見やすいように色やデザインなどを具体化し、市役所と協議する必要がある。

2024 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 5

プロジェクト名（活動テーマ）： 大津市無形民俗文化財「大津絵踊り」の３Ｄデジタル化プロジェクト	
SDGs 目標：	
提案者	：滋賀短期大学　デジタルライフビジネス学科　2 年　久保田　大智
自治体担当者	：大津市　市民部文化振興課課長補佐　中嶋　純子 文化財保護課　和田　光生
連携大学担当者	：滋賀短期大学　デジタルライフビジネス学科 学科長　特別教授　小山内幸治・専任講師　小笠原寛夫

１．取組体制

本プロジェクトは令和 5 年度から取り組んでおり、本年が 2 年目最終年度となる。

滋賀短期大学デジタルライフビジネス学科学生:プロジェクト実施の中心組織であり「大津絵踊り」を３Ｄ化しデータ保存・公開するプロジェクトを担う。学科長・特別教授小山内と専任講師小笠原がアドバイザーとなっている。

大津市役所:プロジェクトの協働組織。本プロジェクトへの助言、評価、伝統文化継承におけるデジタル化の意義の広報を担当する。

大津絵踊り保存会：本プロジェクトの対象。情報提供、データ収集への協力、助言、評価を担当する。

２．背景・目的

大津市無形民俗文化財「大津絵踊り」は、三味線と謡いに合わせて踊るもので、大津花街で江戸後期発生し、幕末から明治にかけて全国的に流行した「大津絵節」に、踊りを付けたものである。かつては、大津の名物であった。「大津絵踊り」は、10 種の「面」と、5 種の小道具を用いて行われるのが特徴である。この「大津絵踊り」を保存するために、昭和 63 年から、保存会を立ち上げ保存に取り組んでいるが、後継者が十分には育っておらず、未来に向けての保存が課題となっている。現在、踊りを継承している方が 5 名おられるが、そのうち 2 名は高齢のため、実際に踊れるのは 3 名である。「大津絵踊り」は、最低でも 3 名の演者が必要であるため、大津絵踊りの継承・保存問題への取り組みは、急務であるといえる。

本プロジェクトでは、踊りをモーションキャプチャーし、デジタル化により 3D空間で踊りを再現することで、「大津絵踊り」の恒久的な保存に取り組むことを目的としている。

3D空間で再現された踊りは、ビデオなどの 2Dの映像で再現されたものより「大津絵踊り」の特徴をつかみやすく、「大津絵踊り」の教育用としても利用が可能であると考える。

３．活動内容

本活動は、昨年度と今年度の２か年計画で行われている。

①「大津絵踊り保存会」に協力を得て、大津絵踊りの３D 空間でのモーションキャプチャーを行いデータを収集。②人物の３Dモデルを作成③キャプチャーデータをもとに Unity 空間に、上記３Dモデルで動作のみを再現④大津絵踊りで使う「面」の３Dモデルを作成⑥３Dモデルにテクスチャーと面の貼り付け⑦動作確認、修正⑧インターネット上で公開、広報を行う予定である。このうち、昨年度は①、②、③、⑤を行ったが、①の過程において後述のような問題点が生じたため、新規のシステムを用いて、ビデオからではなく、スタジオで実際に踊ってリアルタイムで位置情報を取得し、モーションをキャプチャーしてデータ収集することに変更した。そのデータを用いて３D 空間上に踊りを再現できる。

また、昨年度の取り組みで作成した「面」の３D データを利用して、３D プリンタを用いて「面」の複製を行った。

４．目的の達成状況、成果

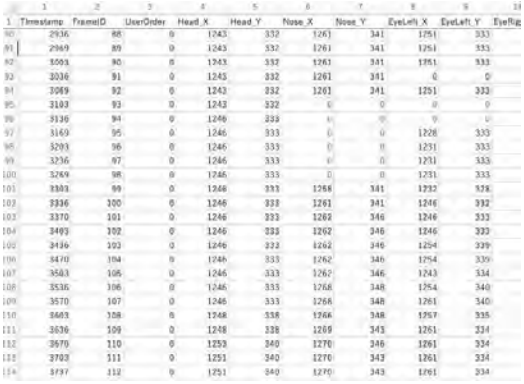
昨年度は、大津絵踊りのビデオ画像から骨格検出し、モーションキャプチャーを行ったが、ビデオ画像からの骨格抽出では、陰にあたる部分のモーションキャプチャーデータの欠損があり、その補完が正確に担保できないことが判明した（図１・２）。

このため、本年度は、キャプチャーのシステムを変更し、位置情報を取得するための「VIVE トラッカー」(人体側：11 台)とそれを受け取る「ベースステーション」(受信側：4 台)を使用し、踊りの動作のデータを取り直した（図３・４）。

大津絵踊り保存会の方々にご協力いただき、踊りの全データを取得し、3D モデルの動きに不備がないか確認を行った（図５・６）。保存会の方々の感想は良好であり、特に若手は踊りの背後に立って確認できることや、3D モデルの着物を着衣していないデータが関節の曲がり具合を非常にわかりやすく示している点が評価された。このデータは後継者を育成するために非常に有効であることがわかった。

また、昨年度の取り組みで作成した「お面」の 3D モデルについては、表面と裏面のテクスチャーを精巧に貼り付けることに成功し、こちらも保存会の方々から良い評価を得れた（図７）。さらに、3D プリンタを用いて実物大の「面」の複製を行ったが、彩色は行われていないものの（図８・９）、こちらも保存会の方々から良い評価を得て、商品化の可能性も考慮できた。

図１　ビデオ画像からの骨格検出



	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	Timestamp	FrameID	UserOrder	Head_X	Head_Y	Nose_X	Nose_Y	EyeLeft_X	EyeLeft_Y	EyeRig
90	2936	88	0	1243	332	1261	341	1251	333	
91	2949	89	0	1243	332	1261	341	1251	333	
92	3003	90	0	1243	332	1261	341	1251	333	
93	3036	91	0	1243	332	1261	341	0	0	
94	3069	92	0	1243	332	1261	341	1251	333	
95	3103	93	0	1243	332	0	0	0	0	
96	3136	94	0	1246	333	0	0	0	0	
97	3169	95	0	1246	333	0	0	1228	333	
98	3203	96	0	1246	333	0	0	1231	333	
99	3236	97	0	1246	333	0	0	1231	333	
100	3249	98	0	1246	333	0	0	1231	333	
101	3303	99	0	1246	333	1268	341	1232	338	
102	3336	100	0	1246	333	1261	341	1246	332	
103	3370	101	0	1246	333	1262	346	1246	333	
104	3403	102	0	1246	333	1262	346	1246	333	
105	3436	103	0	1246	333	1262	346	1254	339	
106	3470	104	0	1246	333	1262	346	1254	339	
107	3503	105	0	1246	333	1262	346	1243	334	
108	3536	106	0	1246	333	1268	348	1254	340	
109	3570	107	0	1246	333	1268	348	1261	340	
110	3603	108	0	1248	338	1266	348	1257	335	
111	3636	109	0	1248	338	1269	343	1261	334	
112	3670	110	0	1253	340	1270	346	1261	334	
113	3703	111	0	1251	340	1270	343	1261	334	
114	3737	112	0	1251	340	1270	343	1261	334	

図２　欠損データ箇所（赤字部分）

図 3　VIVE トラッカーの仕組み

図 4　VIVE トラッカーの装着

図 5　モーションデータ収集

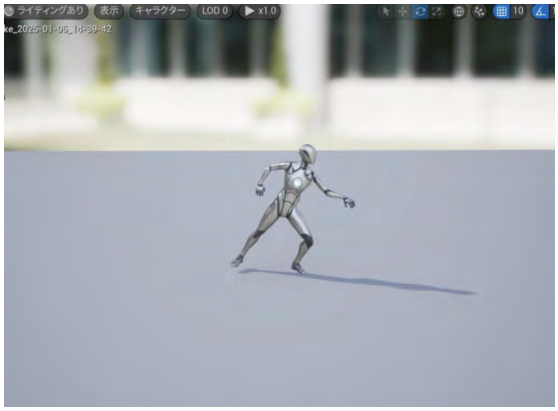


図 6　3D モデルの踊り

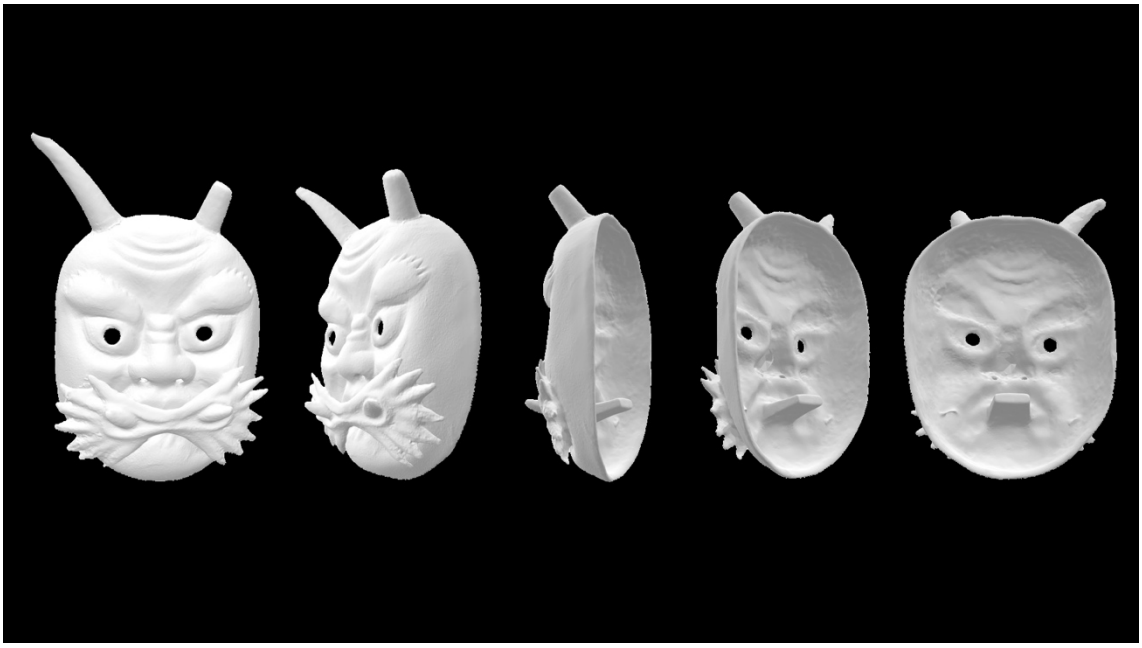


図 7　面の表面と裏面の貼り付け

図 8　実物の「面」

図 9　3D プリンタで作成された「面」

５．課題、懸案事項

今後解決すべき課題としては、以下の点が挙げられる。

① 複数人での踊りのため、音楽、人物の配置と、踊りの同期を工夫する必要がある。

② ３D モデルへの着物のテクスチャーおよび「面」と「小道具」をモデルに貼り付ける必要がある。

①の課題は、ビデオカメラで撮影を行い、2D 動画を使用しながら 3D 空間のポジションを指定することで解決を図る。 ②の課題は、精巧なアーカイブ保存が求められる重要な部分であるため、長期にわたり時間を費やしながら今年度中に解決できるよう進めていく。

2024年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 6

プロジェクト名（活動テーマ）:	山間部に暮らす高齢者とともに考えるLIFE ～健康いきいき作業療法プロジェクト～
SDGs 目標：	
提案者	：びわこリハビリテーション専門職大学 作業療法学科　助教　　木岡　和実
自治体担当者	：東近江市福祉部長寿福祉課 参事　　脇　美早子
連携大学担当者	：びわこリハビリテーション専門職大学 事務センター　センター長　代理　岩崎　康司

１．取組体制

びわこリハビリテーション専門職大学作業療法学科の教員および学生、東近江市長寿福祉課と共同で行う。

【役割分担】

びわこリハビリテーション専門職大学の役割

・住民の生活評価と課題解決に向けた取り組み
・作業療法学科学生（1～３年生）及び教員による作業活動や体操
・アンケート調査と結果の分析、報告

東近江市長寿福祉課の役割

・地域課題に関する情報提供
・住民の生活評価への直接的関与
・課題解決に向けた助言と実践

２．背景・目的

山間部である東近江市永源寺地区は市街地の地域特性と比較して生活環境に何らかの厳しさがあると予測される。加えて、高齢者の老化に伴うフレイルの影響を鑑みれば種々の生活課題が生じていると考えられる。また一方では、食生活や生活習慣によって市街地住民に比べ健康が維持されているといった報告も散見される。

そのため本事業では、永源寺地区に住まう高齢者に対して様々な作業活動を通して語られる自然な語りや評価表による調査から日常生活について評価を実施し（1年目）、地域課題を捉え直した結果から、住民と学生が協働し共に主体的な活動として課題解決に取り組める内容を検討し、実施すること（2年目）を目的とした。

３．活動内容

【活動実施日】①3/16（前年度末）②6/22 ③9/21 ④10/19 ⑤11/23 ⑥12/21

各開催の前後には学生を中心とした企画会議や反省会、またアンケートや評価結果の分析・検討などを開催。

【活動場所】東近江市黄和田町（集会所）

【対象】従来から実施されている奥永源寺黄和田地区のサロンに参加されている地域住民。

毎回約 15 名程度が参加。

【実施内容】

①「インタビューや客観的評価から導き出された地域課題の解決」

・前年度末に行った WHOQOL-OLD と DASC-21 の分析

・インタビュー結果の分析と共有。それにより見えてきた住民が解決したい・する必要があると考える課題について、どのように解決していくのかを検討

②「学生との関わりがなくなっても継続できる活動の提案」

・今後サロン開催時に継続的に行うことができるストレッチや体操を提案。、学生との関わりが終わった後にも、体操が継続できるように体操の内容をまとめた小冊子を作成し配布した。

③サロン参加の動機付けとなるような、レクリエーションなどの活動

・身体的側面、心理的側面、認知的側面、社会的側面などの効果が期待できる革細工やキーホルダー作成などの作業活動を実施。

④近隣の道の駅での啓発活動の実施

・住民と学生とで検討された解決に取り組める内容として挙がった、近隣の道の駅での交通安全に向けた啓発活動の実施。

・啓発活動の際に運転手に配布するチラシや道の駅に掲示するポスターの作成。使用する写真や文言のアイディアを住民から募り、レイアウトを決定。道の駅での活動には、体力に不安のない住民が積極的に参加された。

４．目的の達成状況、成果

昨年度に実施した生活に関するインタビューと QOL（生活の質）評価の分析結果に基づき、黄和田地区の住民の生活満足度は平均的な水準であり、特に大きな不安要素は見受けられなかった。住民は、山間部特有の課題として、買い物や交通事情に関する悩みを抱えているものの、生活全体において大きな問題を抱えているわけではないことが確認された。この結果を踏まえ、今回は住民の生活における具体的な悩みを掘り下げ、住民と学生が主体的に協力し、共に解決策を模索・実行することに焦点を当てた。

具体的には、住民との対話を通じて KJ 法に準じた手法で地域の問題や困りごとを抽出し、それに基づいて学生が実行可能な解決策を検討した。その結果、主要道路における夜間の騒音問題と安全運転を促進するための啓発活動を提案することとなった。特に、スピードを抑制し、交通安全意識を高めることを目的に、住民と共に活動を実施した。

活動の一環として、住民と協力してポスターを作成し、道の駅「渓流の里」での掲示や配布を行った。また、参加者からは、共に作成した啓発ポスターの掲示や配布に協力するボランティアを募り、地域全体への意識向上を目指した活動が展開された。このような協働活動を通じて、住民の関心と積極的な参加を引き出し、地域の問題解決に向けて一歩前進することができた。

５．課題、懸案事項

今回の学生を主体とした活動においては、啓発活動の効果までを検証することが非常に難しく実施するまでには至っていない。また住民が行政レベルで解決に取り組んでほしいと思っている内容も多く聞き取ることができた。一方で人口の少ない地域だからこそ住民が一体感をもってそれぞれの生活を助け合っていることがよく分かり、人の繋がりが希薄化する今日において、重要な要素を考えさせられた取り組みとなった。

【本事業で作成した認知症予防啓発ポスターの１例】

2024 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 7

プロジェクト名（活動テーマ）: いきいき生活プロジェクト 2024-25 ～体力チェックで健康寿命を延ばしましょう～	
SDGs 目標：	
提案者	：びわこリハビリテーション専門職大学 理学療法学科　教授　山内　正雄
自治体担当者	：東近江市健康推進課(保健センター) 係長　中野　由美子
連携大学担当者	：びわこリハビリテーション専門職大学 事務センター　センター長代理　岩﨑　康司

１．取組体制

びわこリハビリテーション専門職大学の役割

・講座の講師、体力測定、体操指導及び運営：理学療法学科教員及び学生

・講座の広報

東近江市健康推進課の役割

・講座の講師、助言指導

・受講対象者の抽出、案内送付

２．背景・目的

滋賀県の高齢化率は、2025 年度まで上昇すると推測されている。本事業では、加齢による運動機能や認知機能が低下するフレイルを予防し、住み慣れた地域での生活を継続できるよう、健康関連のセミナーや体操を通じて、健康寿命の延伸を目指す。「びわこいきいき体操」を指導することで、セルフトレーニングも推奨し「自分で管理する」ことの啓発につなげる。

３．活動内容

フレイル予防のためには、骨折や転倒予防につながる運動機能の維持・改善だけでなく、呼吸・循環機能の維持・改善も重要となる。

そこで、今回はフレイル傾向がある高齢者の参加を募り、体力テストと基本チェックリストの調査を行い、筋力・バランス能力の維持・改善のための「びわこいきいき体操」指導に加えて、栄養指導や呼吸・循環器のトレーニングなどの講演や実技を行うことで、活動性のさらなる向上を目指した。

上記の目標を達成するため、令和 6 年度は 8 回の事業を実施予定であったが、第 7 回目は荒天のため中止し、合計 7 回の事業を実施した。各回の、実施内容は以下のとおりである。

第 1 回　令和 6 年 5 月 25 日　体力、呼吸・循環機能測定①（参加人数　24　名）

第 2 回　令和 6 年 6 月 22 日　結果報告とミニ講座①（参加人数　25　名）

第３回　令和６年７月 20 日　フレイル予防と認知機能（参加人数　22　名）
第４回　令和６年 10 月５日　体力、呼吸・循環機能測定②（参加人数　15　名）
第５回　令和６年 10 月 19 日　結果報告とミニ講座②（参加人数　17　名）
第６回　令和６年 11 月 30 日　フレイル予防と栄養（参加人数　18　名）
第７回　令和７年２月８日　荒天のため中止
第８回　令和７年２月 22 日　体力、呼吸・循環機能測定③（参加人数　21　名）

４．目的の達成状況、成果

令和 5～6 年度の６回分の体力テストの測定結果を、経時的に下の表に示す

測定項目	R5 年５月	R5 年９月	R6 年２月	R6 年５月	R6 年 10 月	R7 年２月
①　握力	30.82	31.17	30.66	30.89	31.95	29
②　TUG	6.27	6.50	5.72	5.79	5.98	5.1
③　10m 歩行	6.82	7.13	7.00	7.1	6.86	7.6
④　２ステップ	1.26	1.31	1.28	1.33	1.31	1.4
⑤　片脚立位	51.17	31.42	33.71	40.56	40.64	40.6

（1）測定項目の説明

①　握力：全身の見えない筋肉の量を反映する「バロメーター」。生活習慣病をはじめとする様々な病気を引き起こす、全身の筋肉量低下を知る手がかりとなりえる。

握力の年代別平均値

年齢	男子（ｋｇ）	女子（ｋｇ）
20～24歳	46.33	27.79
25～29歳	46.89	28.27
30～34歳	47.03	28.77
35～39歳	47.16	29.34
40～44歳	46.95	29.35
45～49歳	46.51	29.31
50～54歳	45.68	28.17
55～59歳	44.69	27.41
60～64歳	42.85	26.31
65～69歳	39.98	25.20
70～74歳	37.36	23.82
75～79歳	35.07	22.49

②　タイムドアップアンドゴー（TUG）テスト：
歩行能力や動的バランス、敏捷性などを総合的に判断するテスト。下肢の筋力、バランス、歩行能力、易転倒性といった日常生活機能との関連性が高いことが示唆されている。

TUGの判定値

年齢	TUG
60-69歳	7.24±0.17秒
70-79歳	8.54±0.17秒
日本整形外科学会によれば、運動器不安定症の判定基準は、11秒以上だと運動器不安定症と判断される。	

TUG テスト

③　10m歩行

10m の距離の歩行速度を、普通の速度で歩いた時間と最速歩行速度の２つで評価する。歩行速度の低下は、転倒のリスクの指標としても用いられている。

転倒の目安としては、歩行速度が、1m/秒以上かどうかが一つの指標ともいわれている。

10m歩行

④　2 ステップテスト：

歩幅を測定することで、同時に下肢の筋力・バランス能力・柔軟性などを含めた歩行能力を総合的に評価できる。

2 歩幅（cm）÷ 身長（cm）= 2 ステップ値

２ステップテスト値の世代別平均値

	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79
男性	1.64～1.73	1.61～1.68	1.54～1.62	1.56～1.61	1.53～158	1.42～1.52
女性	1.56～1.68	1.51～1.58	1.49～1.57	1.48～1.55	1.45～1.52	1.36～1.48

2 ステップテスト

⑤　片脚立位

片脚立位の姿勢を長く保持できる人ほど、歩行中に転倒しにくく、加齢により下肢筋力、バランス能力は低下すると報告されている。

ある調査における開眼片脚起立時間は、それぞれの平均時間は、65 歳代で 44 秒、70 歳代で 31 秒、75 歳代で 21 秒、80 歳代で 11 秒であった。また 75 歳代での転倒群の平均は男性で 18.4 秒、女性では 16.8 秒で、非転倒群男性で 23.9 秒、女性では 24.6 秒と有意の差があったと報告されている。そして運動器不安定症と診断される基準は、15 秒以下であるとも報告されている。

片脚立位

（2）成果の概略

2 年間の活動を通して、機能の改善がみられたテストは TUG、2 ステップス、片脚立位であり、ある程度の歩行能力やバランス能力の維持・改善がみられたと考える。握力と 10m 歩行速度は、大きな変化はみられなかった。

参加者からは、体力テストの結果を知ることで、自分の体力で弱いところが理解でき、体操などで弱い部分を強化できることで非常に好評であった。

2 年間の結果から、夏季や冬季である程度の運動機能の増減が認められるものの、2 年間全体として観察すると、ある程度の機能の維持・改善が認められた。従って、筋力や歩行改善の体操を取り入れた「びわこいきいき体操」の指導や運動機能改善のための啓発活動が、機能維持・改善の一助となったことが示唆され、この事業の目標は達成できたと考える。

５．課題、懸案事項

課題、懸案事項としては、この事業を終了することで、自分の運動機能や歩行機能レベルが認識できなくなり、弱化した部分を強化できなくなる可能性が考えられる。

今後、体力テストと「びわこいきいき体操」指導を、何らかの形で継続して、地域住民のフレイル予防や運動機能の維持・改善につなげていく必要があると考えている。

本事業で作成した教材（体力テストの実施内容・目的、結果の見方、改善のための体操プログラム）

2024 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 8

プロジェクト名（活動テーマ）： ビワイチ「歩育」のススメ～幼稚園で、親子で楽しもう～	
SDGs 目標：	
提案者	：滋賀大学教育学部幼児教育コース奥田ゼミ生５名
自治体担当者	：草津市子ども未来部・幼児課（東郷先生）
連携大学担当者	：滋賀大学教育学部　奥田援史教授

１．取組体制

この取組の主体は、滋賀大学教育学部幼児教育コースの奥田研究室ゼミ学部生５名であり、この学部生がビワイチ歩育マップを作成する。次に、市内幼稚園等でビワイチ歩育マップを活用していただく実践を行う。

２．背景・目的

近年、活発に体を動かす遊びや外で遊ぶ時間が減り、幼児の運動量低下や多様な動きの獲得の遅れが指摘されている。また、指導教員（奥田教員）も滋賀県内の幼児運動能力を測定した際、全般的に低下傾向にあり、草津市においても同様の傾向がみられると指摘している。幼児期において、体を動かすことは、体力や運動能力の基礎を培う上で重要な事柄である。また、丈夫な体づくりや意欲的な態度形成などさまざまな分野においても体を動かすことは大切であるといえる。そこで、今回この取組では、幼児の身体活動量を増加させるため、草津市の遊び場や公共施設などを取り上げ、親子で歩き、体を動かす指標となる「歩育マップ」とそれに付随するガイドブックを作成する。この地図とガイドブックを活用し、幼稚園外の時間でも歩いたり体を動かしたりすることを促す。

３．活動内容

歩いたり、体を動かしたり、親子で楽しむことができる草津市内のスポットを取り上げ、それを草津市の地図に掲載する。そこへ訪れたり、幼稚園外の時間で体を動かしたりしたときの歩数を記録し、協力していただく園内の幼児の歩数を合計し、ビワイチを達成できるようにする。また、そのマップに基づいた持ち運び可能なガイドブックを作成する。ガイドブックには、スポットごとに幼児と訪れる際に知りたい情報や実際の様子、体を動かす遊びの例などを掲載する。作成後は、草津市内の幼稚園に協力をお願いし、万歩計をもとに歩数を個人や園内で記録し、歩数や運動量の増加、体を動かすことへの意欲促進を図る。

４．目的の達成状況、成果

マップを作製するにあたり、de 愛ひろばを中心に草津駅から徒歩圏内の渋川周辺や草津宿本陣周辺の街道を実際に歩き、幼児と訪れる際に知っておきたい情報であると考えられるトイレの有無や周辺の商業施設、飲食店などを視察し、確認した。さらに、草津市立図書館や立木神社などの公共施設にも訪れ、その周辺の歩道も実際に歩いた。実際に歩くことによって、de 愛ひろばには幼児から大人まで体を動かそうとする人たちに対する工夫がなされていることや、草津宿本陣周辺は昔ながらの街並みが残る良い場所であるが、狭い歩道など幼児と訪れる際には注意すべきところもあることが分かった。また、これらの既に訪れたスポットでは、マップやガイドブックに掲載するため、その様子を写真に撮った。ガイドブックに関しては、掲載すべき情報を吟味した。具体的には、既に訪れたスポットの掲載する写真を選ぶ、そのスポットまでの公共交通機関を用いたアクセス方法や実際に訪れて分かった良さや注意したいことを掲載するなどである。

ガイドブック仮案

de 愛ひろば　トイレの様子

de 愛ひろば　標識の工夫

草津宿本陣周辺の歩道が狭い道路

また、ビワイチ歩育マップの簡易版としてA3サイズの「びわいちまっぷ」を作成し、実際に1つの家庭で実践していただいた。作成した「びわいちまっぷ」は、ビワイチを達成するために歩数を記録するためのマップであり、今回は試作段階であるため、①マス目を色で塗る、②マス目にシールを貼る、③マス目にスタンプを押す、④マス目にマグネットを置くの中から1つを選択し、幼児が自分で歩数を記録できるようにした。今回実践をお願いした家庭では、マグネットを用いて歩数を記録する方法で、幼児が楽しく歩数分のマグネットを置いている様子が観察できた。期待していた通り、幼児自身で物を使って見える形で記録していくことによって、歩いたり、運動したりしている実感を得やすくなっていたのではないかと考える。

「びわいちまっぷ」に記録する様子

歩いている様子

５．課題、懸案事項

草津市内のお出かけスポットとして、他にも ai 彩ひろばや帰帆島公園、ロクハ公園など体を動かすことができる公園を中心に案を挙げている。マップ、ガイドブックいずれも作成するにあたり、現時点で実際に訪れたスポットでは十分でない。そのため、お出かけスポットとなる場所や親子で訪れたい場所を調べ、そこへ出向く。加えて、歩くだけでなく、幼児期に身につけたい 36 の動きを中心とした楽しく体を動かすことができる動きや遊びの掲載などマップやガイドブックの内容が充実するようにする。また、スポットごとの情報を掲載するだけでは、実際に訪れようという気持ちにつなげるには弱く、このプロジェクトとしてのオリジナリティに欠けるのではないかと考えられる。よって、一度訪れたことがあるスポットでも再度、体を動かしたり、散歩ついでに訪れたりしたいと思えるような工夫について考慮し、マップやガイドブックにその案を活用し、よりよいものを作成できるようにする。さらに、園に置かせていただく地図やガイドブックの素材や大きさを幼児の実態や身体的特徴に合わせて考えていく必要がある。今回の簡易版マップは A3 サイズで作成し、幼児 4 人でそのマップを囲うに十分であった。実際には、約 20～30 人でマップを見ることになると予想されるため、簡易版の実践から、来年度の園での実践では A1 サイズのマップで一度実践する。歩数を記録する物についても見やすさや記録のしやすさ、記録したものの維持のしやすさなどを中心に再度検討したい。また、歩数の記録は幼児に万歩計を身に付けてもらい実施しようとしているが、幼児が万歩計を気にせず普段の動きと大きく変わらず十分に体を動かすことができるのか、つける場所によって差が出てしまわないかなどについて再検討し、本実践までに最適の方法を考える必要がある。

2024 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 9

プロジェクト名（活動テーマ）： 「読んで」、「聴いて」、「話して」、広げる読書の魅力！	
SDGs 目標：	
提案者	：滋賀大学経済学部森ゼミ： 田畑 里紗，菊池 日菜，山口 桃花
自治体担当者	：東近江市八日市図書館，橘 良枝 副館長
連携大学担当者	：滋賀大学経済学部，森 宏一郎 教授

１．取組体制

① 高校生向けイベント

・東近江市内の各図書館司書に図書館の現状や利用者の傾向について取材

・八日市図書館司書と協働し、高校生向け読書イベントを企画・広報・運営

② 図書館展示

・八日市図書館内に、利用者が好きな読書スポットを書いて模造紙に貼る、利用者参加型の掲示を実施

③ 本に関する SNS 投稿

・イベントに参加しない高校生に対しても読書の楽しさを伝えるため、本に関連した投稿を発信

２．背景・目的

東近江市との協議で、10～20 代の読書離れ・図書館離れが深刻であることが判明し、解決のために協働したいということになった。スマホ利用が普及した現代において、読書に没頭する機会は減っている。高校生に、読書の面白さを体感してほしいという思いから、高校生の読書習慣形成を大きな目標に掲げ、まずは本に触れる機会を作る目的でイベントを企画した。

３．活動内容

① 高校生向けイベント「高校生からはじめる本あそび」の開催

目的：高校生の図書館利用の促進と本に接する機会を創出する

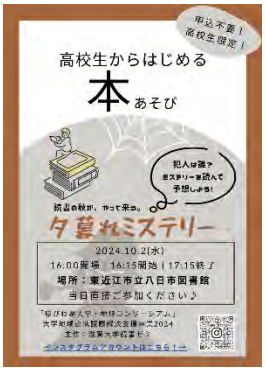
第１回：八日市図書館にてワードウルフを基にした読書ゲーム『読書人狼』と幼少期に読んだ絵本を紹介し合うことで新たな発見と交流の生まれる『なつかしの絵本紹介』の２企画を行った。

第２回：八日市図書館にて短編ミステリーの事件パートのみを読み、得られた証拠から真相を協力して推理するゲームを行った。

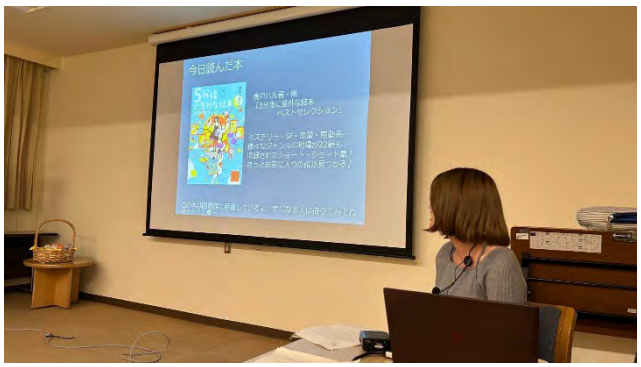
第３回：八日市図書館にて第１回イベントで好評だった読書人狼を改変した『新・読書人狼』を行った。高校の図書室の司書さんが活動見学として参加された。

第４回：八日市図書館にて自分のお気に入りの１冊をもっと好きになり、もっと広める『しおりづくり』企画を行った。

（イベントポスター：左から第１～第４回）



(左：第３回イベントの様子　右：イベントで使用した本)

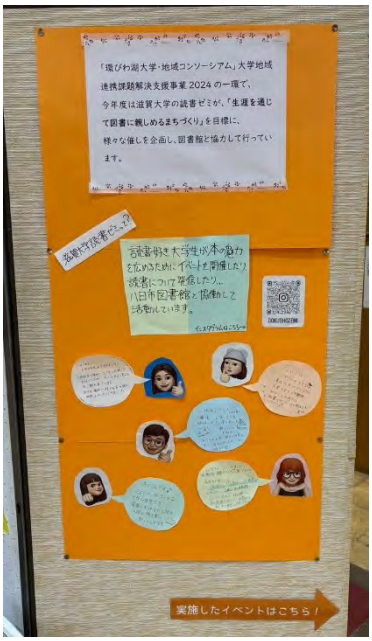


② 図書館展示

目的：本を読む以外の切り口から本を通じた交流を行うことで、読書から距離のある層へ読書を始めるきっかけを提供すること

八日市図書館１階「季節の展示コーナー」にて、お気に入りの読書スポットを図書館利用者に回答してもらい模造紙に貼ることで、本を通じた交流を生み出す。八日市図書館内にて利用者が好きな読書スポットを書いて模造紙に貼る『利用者参加型の掲示』を実施した。

（展示物の写真）



③ 本に関する SNS 投稿

目的：身近な SNS を通じた読書情報の継続的な発信により、高校生にとって読書との距離が少しでも近づくことを目指すこと

高校生が来館しづらい要因として、時間的な制約や心理的ハードルが推測された。そこで Instagram を通じた読書関連の情報発信やイベント情報の広報を実施した。

（画像：本紹介の投稿の様子）

４．目的の達成状況、成果

高校生を対象としたイベント（これまで計 4 回実施）では、数名の高校生に参加してもらうことができた。中にはイベントで用いた本に興味を持ち、借りて帰ってくれた高校生

もいた。高校生の読書習慣形成にはまだほど遠いが、高校生の図書館利用の促進と本に接する機会を創出するというイベントの目的は部分的に達成できたと言える。

読書マップの代替として行っている図書館展示では、現在『好きな読書スポット』を図書館利用者に回答してもらい掲示してもらうことで、図書館を活気づけている。11 月に行われた本展示は、最終的に模造紙が埋まるほど多くの利用者に参加してもらえた。一方で、読書から距離のある層へ読書を始めるきっかけを提供するという目的は達成できなかった。

本に関する SNS 運用では、主におすすめの本や読書イベントについて投稿した。本プロジェクトの Instagram のアカウントは、数十人の高校生にフォローしてもらうことができた。10 月には、２週間にわたりおすすめの本紹介の投稿をして、一部高校生からの反応をもらうことができた。高校生にとって読書との距離が少しでも近づけるという目的は部分的に達成できたと言える。

５．課題、懸案事項

《課題》

イベント参加者を思うように増やすことが出来ていない点が大きな課題として挙げられる。これまで、東近江市にある図書館や高校、八日市駅など、あらゆる場所に広告を掲示し、SNS を用いて高校生へアプローチし、高校生にイベントの参加を呼びかけてきた。しかし、それらには全く効果がなかった。実際イベントに参加してくれた高校生の参加のきっかけは、ほとんどが偶然図書館に居合わせたためであった。つまり、イベントに参加してくれた高校生は普段から図書館を利用する習慣を持つ学生である可能性があり、図書館に普段来ない高校生をイベントに集客することは出来なかった。

《懸案事項》

高校生の図書館離れは依然として解決できておらず、大きな懸案事項である。前述のとおり、八日市図書館で行ったイベントに参加した高校生は、偶然図書館に居合わせたところをイベントに勧誘したことがきっかけで参加したケースが大半である。図書館を普段利用しない高校生に向けて読書や図書館利用を促す SNS 投稿も行ったが、それが高校生の来館につながったかは定かではない。部活や学業で多忙を極める高校生が、いかにして図書館で過ごす時間を確保するかという問題の解決策は依然として見つかっていない。

2024 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 10

プロジェクト名（活動テーマ）： 1000 年の歴史、鮒漁への挑戦
SDGs 目標：
提案者：組織・団体名：びわこ成蹊スポーツ大学　アウトドアスポーツセンター 代表者の役職・氏名：センター長　黒澤　毅
自治体担当者：大津市　産業観光部　農林水産課 役職・氏名：係長　安孫子　淳史
連携大学担当者：林　綾子

１．取組体制

本プロジェクトは､大学のアウトドアスポーツセンター主催事業として実施する地域貢献のための通年型野外教育プログラムにて、教員・職員・学生が一緒に企画・指導・運営にあたっている。プログラム内容は、アウトドアスポーツを専攻する学生が中心となり、企画・指導を担当する。今回は、春夏秋冬 4 回のプログラムのうち、春のキャンププログラムの一環として、鮒漁体験を組み込んで実施した。鮒漁の部分では、琵琶湖にて鮒漁を生業とする漁師の協力を得、事前の学生の研修や､調理の練習､事前学習を行ったうえで当日は､子どもたちの関わりを手助けし、実施した。

２．背景・目的

本プログラムは、2010 年から継続しておこなっている、地域の小学生を対象とした野外教育プログラムであり、四季を通じた多様な自然環境を用いたアウトドアスポーツを楽しみながら、自己や他者、自然との関係向上を目指している。リピーターも多いことや、自然・文化の豊かな環境であることから､スポーツのみならず農業や漁業も取り入れ、自然の恵みを楽しみながら享受し、学ぶことのできる機会提供を行っている。数年前から鮒漁も取り入れており、実際に琵琶湖に出て、歴史ある漁法を体験し、収穫した魚をいただくこと、体験を通して琵琶湖や魚、文化を学ぶことの価値が確認されている。また、指導する大学生にとっても貴重な経験となり、共に学び、成長するという本プログラムのコンセプトに適した活動内容である。この度のプロジェクトとしては､通年型プログラム内で鮒漁体験を取り入れたキャンプを体験することから､琵琶湖の恵を身をもって感じ、固有種の減少や外来種の問題、1000 年続く漁法の知恵について学び、持続可能な自然との関係性について学ぶことを目的とした。

３．活動内容

まずは大学生が魞漁を体験し、魞漁について学び、琵琶湖の問題や文化について学び、それらをどう子どもたちに楽しみながら学んでもらうか考え、プログラミングを行った。

プログラムは琵琶湖岸でテント泊を行う１泊２日のプログラムであり、今年度最初のキャンプであったことから、初参加の子どもたちも多く、仲間づくりや、基本的なキャンプスキルの獲得など、仲間や自然との関わりのスタートとしての位置づけであった。2 日目の朝に魞漁にでかけることから、1 日目の夕方、魞漁師さんから魞漁についての説明を受け、夜には琵琶湖の魚について、子どもたちが楽しみながら学ぶことのできる活動を取り入れた。2 日目朝から魞漁にでかけたが、当日風が強かったことから短縮での実施となった。しかし魞漁師さんと一緒に実際に漁船に乗って琵琶湖に出て、遠くから見るだけであった魞の中に入っていき、その仕組みを学び、網や重りを協力して動かし、ツボに魚を集め、たくさんの魚を獲ることができた。漁師さんから、魚の名前や種類を教えてもらい、自分たちで分別を行い、スタッフの協力を得ながら調理も行った。自分たちで獲り、料理した魚はみんなで美味しくいただくことができた。昼食後にも湖魚にからめたゲームなどを行い、琵琶湖の恵を多様な形で味わうプログラムとなった。

１日目	２日目
・アイスブレイク ・仲間作りゲーム ・テント設営 ・野外炊事 ・琵琶湖と湖魚の勉強会 ・ナイトハイク ・就寝	・朝食 ・漁に出発 ・魚の仕分け ・収穫した魚を使って昼食作り ・湖魚ゲーム ・解散

から、このような活動との親和性も高く、子どもたちは非常に興味を持って取り組むことができた。事前学習、魞漁体験、仕分けや調理、食するところまでの一連での体験から、子どもたちは琵琶湖の恵や伝統の知恵・文化を楽しく味わうことができた。また、関西各地から大学に通っている大学生にとっても初めての体験であり、子どもたちと一緒に貴重な経験をすることができた。大学生と子どもたちが一緒に恵みを味わい、目標１２「持続可能な生産消費形態を確保する」、

また、目標１４「持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する」ことの重要性をそれぞれが感じられたようである。特に大学生は、琵琶湖の恵や歴史を体感すると同時に、鮒漁師として生業をたてることの難しさや、魚が減っているという実態を目の当たりにした。

５．課題、懸案事項

天候・風の影響、魚が取れないこともあるなど、自然ならではの要因や、船に乗れる人数、実際に行う作業内容などから、安定したﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑとして大人数に確実に実施することは難しい。教育プログラムとしての普及を図るには、常に安全管理、代替案、工夫が求められる。しかし、その難しさこそが実態であり､漁獲量の激減等の現状の中で関係者は非常に大変な思いをしながら取り組みを続けている現状がある。1000 年も続く伝統ある漁法と魚については、これからの持続可能な自然との関係性を考える非常に効果的な教材としての可能性を含んでいる｡歴史と伝統の割に、認知度も低く、今後もこのような活動を通して、多くの人々に知ってもらい、持続可能な社会を実現することへ少しでも貢献していきたい。

2024 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 11

プロジェクト名（活動テーマ）： 動作の客観評価がつなぐスポーツライフの探索・啓発的活動	
SDGs 目標：	
提案者	：びわこ成蹊スポーツ大学・准教授　吉川文人
自治体担当者	：滋賀県文化スポーツ部スポーツ課　上坂恭平
連携大学担当者	：びわこ成蹊スポーツ大学　スポーツ統括本部　宇野太基

１．取組体制

提案者及びそのゼミ生らを中心とした本活動主体は、被写体の運動機能の質的向上に資する目的で、分析対象の動作映像と、それに付随する動作特徴すなわち動作の優勢方向とその速度、加速度の推定値をフィードバックすることを活動の中心として位置づけ、本取組みを構想した。自治体からは、次の 2 つの課題、すなわち①科学的根拠に基づく正しいスポーツ動作を体系化し、汎用性のある教材を開発する課題、②安全・安心なスポーツ実施環境の構築や県民の健康増進を図るため、県内のスポーツ少年団指導者や総合型地域スポーツクラブ等での教材の活用につなげる課題への対応が期待された。

これらを踏まえ、本取組みは特定の組織・団体に限らず、スポーツ動作時の収録及びデータフィードバックに同意・希望した組織・団体のみならず個人に対して動作の客観評価を行うことを想定し、実験環境から離れ実地における映像収録・データフィードバックに取組んだ。本活動の主体は、びわこ成蹊スポーツ大学吉川ゼミ学生希望者であり、提案者の指導の下、動作映像の収録からデータの処理、分析、フィードバックまでの作業を担った。本取組が動作映像のフィードバック対象と活動主体の双方の目的に資するように、提案者はデータ収集やフィードバック活動が適切かつ倫理的に行われるように、特に関係者の権利とプライバシーが保護されるように、事前指導を行い、その上で個別のデータフィードバック活動を実施した。

２．背景・目的

自治体では、健康の維持増進やスポーツ活動の推進を重視し、スポーツによる地域社会の活性化に向けた持続可能な仕組みが模索されている。Society5.0 や超高齢化社会への対応やそれらを担う人材確保も課題である。特に人材確保については、予防医学的見地からも適度な運動が推奨され、「科学的エビデンスに基づくスポーツの価値の普及の在り方」（日本学術会議，2020）を踏まえたスポーツ指導者の養成がスポーツ大学に期待されるところである。スポーツ大学の教学においても、データの処理、分析に関する知識とスキルを戦略的に高めるための設えが求められている。このよう

な複合的な課題克服のための啓発活動を、独自の動作分析系を用いたデータフィードバック活動を通して試行する。

当初の計画では、具体的に以下に列挙する概ね 3 つの活動計画を立案していた。

①滋賀県内在住で教員を志望するゼミ生が継続的に指導に携わっている県下高校陸上部投擲パートの選手をはじめ、支援対象の拡張・増員を図り、動作の客観評価が可能なデータフィードバック活動を継続し、活動記録の資料化を図る。

②スポーツ動作の量的・質的評価の“こと体験”ができる機会を企画・実行する。

③健康志向運動を含め、スポーツ動作を分析・可視化し、様々なニーズに対応可能な教材を開発する。

３．活動内容

具体的に実施した活動内容として、（1）県内高校陸上競技選手 1 名について 4 月 27 日、5 月 4 日、7 月 21 日、8 月 12 日と 4 日間にわたって投擲動作映像の収録からフィードバックまでの一連の活動を行った。また、(2) 支援対象の拡張･増員の実績として、県内高校野球チーム（1 校）について 5 月 18 日に 5 投手、11 月 10 日に 3 投手の試合時投球動作を客観評価の対象として、動作映像の収録からフィードバックまでの一連の活動を行った。加えて、(3) 健康志向運動を含め、スポーツ動作を分析・可視化し、様々なニーズに対応可能な教材を開発する取組みについては、教材化に同意が得られた被写体の動作映像について教材（コンテンツ）の制作を行った。なお、スポーツ動作の量的・質的評価の“こと体験”については実施には至らなかった。

４．目的の達成状況、成果

具体的な達成状況を示す事例として、上記に挙げた３．活動内容の（1～3）について順に述べる。

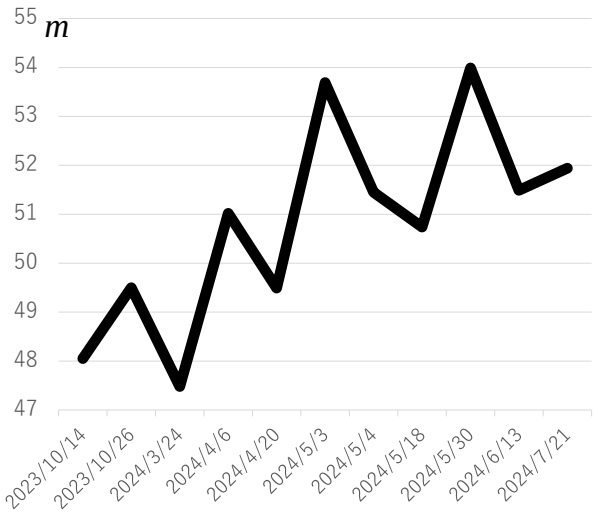


図１．フィードバック対象選手の記録の遷移

担当学生が本活動を実施している期間を含め技術指導を行った県下高校ハンマー投げ選手の記録の遷移（図 1）と動作特徴の実例（図 2）を示す。指導期間前と指導期間後の記録差は、＋5m64cm であった。その要因に含まれる事項として、①投擲方向への前後方向の体重移動に着目したとき、地面反力に伴う動作の加速度が増大しており、特に３・４番目のターンが高速化していること、②すべてのターンにおいて地面に作用する力とその反力に伴う加速度がリズミックに大きくなってことが、図 2 から視認できる。なお、図 2 の上部は投擲方向に対して側方、下

部は後方から収録した動作の分析結果であり、それぞれの左側の動作特徴は2023年10月26日の試技について結果、右側の動作特徴は 2024年8月12日の試技についての結果である。それぞれの動作特徴の結果を踏まえると、ハンマーの慣性モーメントを増大させるように体重を移動させる技術が質的に向上したのではないかと推察される。

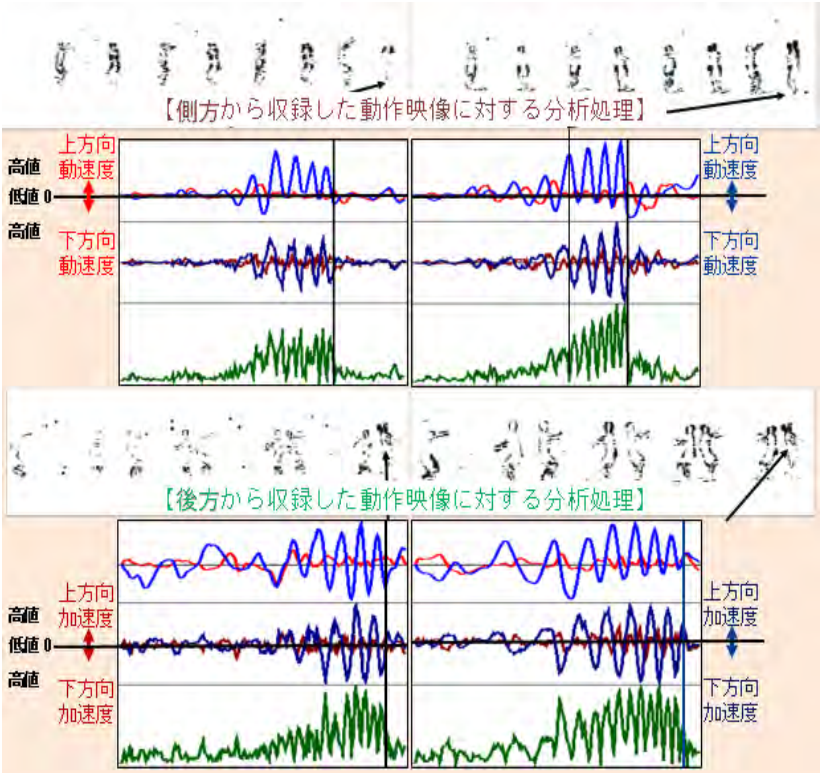


図 2. 側方（上図）・後方（下図）から収録したハンマー投げ時上下左右配向速度・配向加速度及び加速度の 10 カ月経過前後比較

ここで、本事例の活動背景と概要を付記したい。活動背景として陸上競技投擲種目選手及び指導者を含む競技人口は少なく、県下においても例外にもれず競技経験を有する指導者が必ずしも多く存在する状況にはない。そのような状況下において、大学在学中までハンマー投げの競技経験を有する担当学生が、本取組み以前から県下高校生投擲選手の技術指導に関与していた。本取組みの実施にあたり、そこに動作の客観評価機能を付与することとしたが、その上さらに、担当学生は上述の背景を踏まえ、選手自らが技術的な課題を解決していくプロセスを主体的に計画・実践できる力を養成できるように創意工夫をしていた。具体例の一つとして、動感シートをもとに選手に動きの言語化を求める取組みを行っている。少なくとも、県下における社会的背景を踏まえ、セルフ・テクニカルコーチングの力を育むため、相応の指導観・

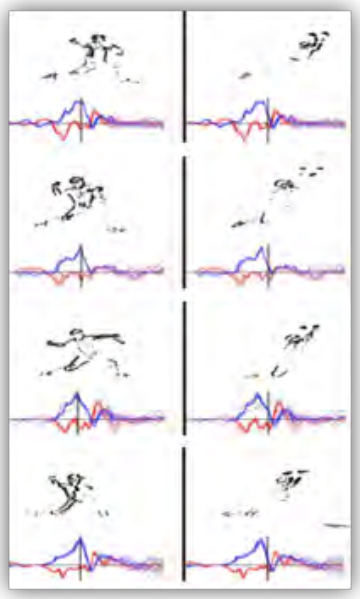


図 3. 側方から収録した野球投手 4 名投球時（左：ステップ足接地、右：リリース）の姿勢と各 10 球の動作特徴（上下左右配向速度の遷移）

教材観をもって選手の技術改善に取組んでいた。

上記（2）の野球投球動作への活動の拡張については、図 3 にフィードバックコンテンツを例示する。県下高校野球部には、各投球の動作映像と上下・左右配向速度及び配向加速度、加速度の波形付きコンテンツ（e.g. 図 3）をフィードバックした。図 3 は、側方から収録した投球動作であり、向かって左側から右側に向けて体重移動が加速しステップ足接地に伴い急減速している様子（青波形の山）や、体幹を回転・捻転させ、前上方に生じる地面反力を投球腕・上肢を振り下ろす力と相殺させながらボールリリースする様子（赤波形の山につづく青波形の山）が視認できる。このように、実地の実践環境においてスポーツ動作とそれに付随して可視化した動作特徴をもとに、動作メカニズムを踏まえ練習・トレーニング効果を評価することができることについて、本活動をとおして示唆する取組みを行った。

上記（3）については、スポーツ外傷後の競技復帰までの身体的リハビリテーション過程において実施したその場足踏み、スクワット、フットワーク、あるいはスポーツ動作ではサッカー競技の左右ボールタッチ動作やボールキック動作、陸上競技砲丸投げ動作等、様々な動作について教材開発に取組み、内容を纏めるポスターを制作した。

本取組みは、右の寄稿文にもあるように、より多くの人々が動作の仕組みに興味を持ち、主体的に運動機能の改善やスキル向上を目指すというスポーツライフに向け、実地における動作の客観評価の実現可能性について検討する内容を含んでいた。本フィードバック活動が、運動機能の質的向上に資する気づきにつながっていたのか、その気づきとは何か、いかに運動機能の質的向上に寄与し得るのか、さらには自治体の課題解決に向けた今後の施策に貢献し得るのか等々、残された課題は多い。システムの研究開発とその成果の応用をスパイラルアップさせることで、この取組みを今後につなげていきたい。

動作分析による知識を広げ、深める

新年を迎えるたびに、心機一転して抱負や目標を立て、規律ある生活を始めようと思った経験は、多くの方に共通するものではないでしょうか。私もこれまで、「身体と心を引き締め、充実した日常を送ろう」と幾度となく意気込んだ末に、運動に取り組むものの、結局、長続きせず挫折してしまうことを繰り返してきました。その結果、理想とは程遠い身体と心の状態をなかなか改善できずにいます。

そんな自身の経験を加味しつつ、私はカメラとパソコンを用いて簡単に動作を分析できるアプリケーションの開発に取り組んでいます。このアプリは、私が提案した独自の動作特徴抽出法を基に、動画内の物体の移動方向、加速度、速度を簡便に推定できる仕組みを備えています。

スポーツが未来を変える

BIWAKO PRIDE

吉川文人准教授

特に、力の作用・反作用による身体の動きが、加速度や速度の変化として反映されるため、これらの特徴点を抽出することで、動作の分析・評価だけでなく、データ処理の効率化や自動化にも貢献できる可能性があります。

このような効率化は、スポーツ、トレーニング、日常生活の中で繰り返される動作を分析する際に特に有効です。また、ビッグデータ応用を視野に入れた場合には重要な意味を持ちます。

これまで、野球の投球やサッカーのキック、ウエートリフティング、その場足踏みなど、多様な動作を分析し、技術の適用可能性を検証してきました。2024年度には、大学地域連携課題解決支援事業の助成を受け、「動作の客観評価がつなぐスポーツライフの探索・再発活動」をテーマに、運動機能の質的向上に取り組む方々を支援する活動を進めています。

この活動では、自治体が抱える課題である「スポーツを活用した元気な町づくり」や「データサイエンス人材の養成・復帰」に対応するため、学生主体の取り組み機会を創出しています。

本活動のテーマには、動作を行う側とフィードバックを行う側の双方が動作分析を通じて知識を深め、それを他社と共有することで、より多くの人々が動作の仕組みに興味を持ち、主体的に運動機能の改善やスキル向上を目指すというスポーツライフへの願いが込められています。私自身、運動機能の低下にあらがうためにも、自分を分析対象として運動機会を増やしつつ、動作分析を楽しんでいきたいと考えています。

◇

スポーツによって未来がどう変わるのかをテーマに、びわこ成蹊スポーツ大学の教員らがリレー形式でコラムを執筆します。

吉川文人（よしかわ・ふみと）　東京都立川市出身。修士（体育学）、博士（工学）（いずれも筑波大学）。国立スポーツ科学センター、（独）産業技術総合研究所等の任期付き研究員を経て、現在はびわこ成蹊スポーツ大学スポーツパフォーマンス分析コース准教授。

びわこ成蹊スポーツ大学

©産経新聞社　（2025 年 1 月 10 日夕刊掲載）

2024年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1年目）

No. 12

プロジェクト名（活動テーマ）： スポーツ施設・公園を活用した市民スポーツ実施、健康意識の浸透研究―スポーツによって市民のWELL BEINGを実現するために
SDGs 目標：３
提案者：組織・団体名：びわこ成蹊スポーツ大学　スポーツビジネスコース 石井ゼミ３年次生 ＮＰＯ法人　まちづくりスポット 代表者の役職・氏名：教授　石井智
自治体担当者：大津市　市民部　スポーツ課 役職・氏名：土井係長
連携大学担当者：スポーツ統括課　宇野太基

１．取組体制

本研究は、大津市における市民の運動・スポーツ実施率の向上、市民のwell-beingの向上を実現するための政策立案に貢献するため、公園や商業施設を含むブランチ大津京をマネジメントするＮＰＯ法人まちづくりスポットとびわこ成蹊スポーツ大学スポーツビジネスコース石井ゼミが共同で行ったものである。

市民生活に密着した場所（商業施設に隣接する公園）でのスポーツ能力測定を実施し、市民に運動への関心を喚起すること、また（買い物などの「ついで時間」に）家族で運動することによって子育てしやすいまち大津の実現、ひいては大津市民のwell-beingの創出につながるという仮説の検証を試みたものである。

２．背景・目的

大津市市民部スポーツ課が主催する「大津市スポーツ推進審議会」における問題意識として、全国的に見ても低調な市民のスポーツ実施率（「１８歳以上の週１回以上の運動・スポーツ実施率」が直近３年でいずれも目標を下回っていること）についてどう対策をとるか、というものがあった。その会議の委員長である、びわこ成蹊スポーツ大学石井教授はその問題を解決には、スポーツを目的的に行うのではなく、普段の生活行動の「ついで」に、またその行動の「アイドルタイム」にスポーツを行う場、機会を作り出すことが市民のスポーツ実施率を向上させ、さらには市民のWELL-BEINGにつながるのではないかという仮説を立てた

３．活動内容

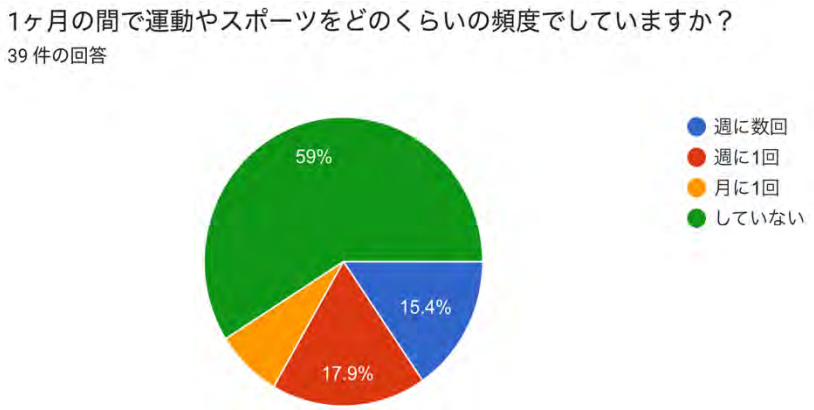
我々は、スーパーマーケットや飲食等の商業施設を有する「ブランチ大津京」が主催した「スポーツフェス」にて、「大人の体力測定無料体験会」を実施し、握力、長座体前屈（柔軟性）、いす立ち座りテスト（大腿部の筋力、筋持久力）、閉眼片足立ちテスト（足の筋力やバランス機能）、

全身反応測定（敏捷性、ジャンプ力）、3 分歩行テスト（どれだけ効率よく酸素を取り入れられるか）等の測定を実施した。参加者にはそれぞれの記録を得点化し、全国の同世代と比較できるようにして、現在の自身の運動能力を把握できるようにした。参加者に対してはアンケート調査を実施し、測定会に参加した意図や今後、スポーツや運動に取り組む意欲、こういったイベントが WELL-BEING につながる可能性について調査し、分析を行なった。

４．目的の達成状況、成果

アンケートの集計、分析結果は以下の通り。

測定会に参加し、アンケートに答えてくださった人の６０％が、１ヶ月の運動実施についてほとんどしない、と回答していた。このことからも、運動をしたくない、というより、スポーツ実施に生活時間を割けない人が一定数存在すると考えられる。



自由記述からは、「運動をしたいと思っているが、運動できる場所やイベントが少なく、機会に恵まれない」という回答が多く見られ、運動に対する意欲は十分にあることがわかった。

「大学内のイベントで子育て世代も参加できそうなものがあれば参加したいです」

「親子で出かけて体験できる場所はどんどん増えて欲しい」

「プロスポーツやマイナースポーツの親子体験 やる側でも運営側でもいいので機会を増やして

ほしい」
「身体を動かしながらコミュニケーションできる」、「子どもが普段の生活では、しない動きを体験できた」「家族で楽しめた」と様々な意見があった。

このことから、今回のように子どもが参加するイベントのついでに、また、買い物のついでに、「場」と「機会」-買い物ができる場の近くでスポーツができる、あるいは、子どもと一緒に遊ぶ流れでスポーツができる、あるいは子どもと一緒に参加し楽しむことができるというシチュエーションを創出することができれば、子育て世代層のスポーツ実施率の向上はもちろん、子育て満足の向上に寄与し、その結果市民の well-being に貢献するのでないかと考えられる。

５．課題、懸案事項

今後の課題としては、より市民の運動参加や子どもと一緒に活動することが well-being につながる、という因果関係を明らかにするために、「子育て満足」を従属変数とし、「スポーツ頻度」や「スポーツ参加度」、「コミュニケーション頻度」などを独立変数とした重回帰分析が行えるような調査設計を行う必要がある。また今回はアンケート調査が体力測定者に限定されたため、データ数が少なく信頼性の高い有効な分析はできなかった。そのため調査対象を広げ、より精度の高い分析を行うためのデータを蓄積する必要がある。

また、その結果をエビデンスとし、大津市の特性に応じた施策を提案して well-being 向上に貢献する具体的なプランを策定すること、また提案した施策の実施後、長期的な効果を検証し、継続的な改善を行うことが求められる。

2024 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 13

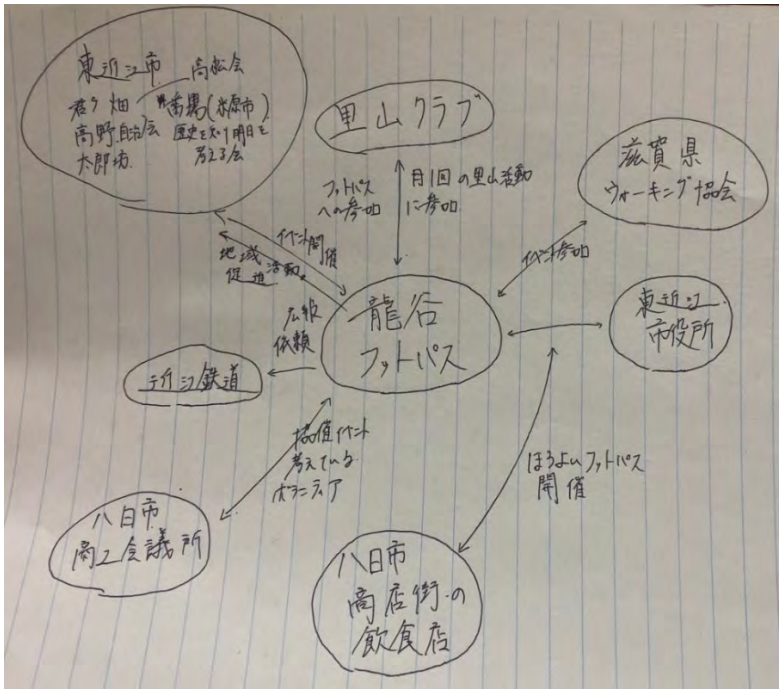
プロジェクト名（活動テーマ）： 「龍谷フットパスプロジェクト」	
SDGs 目標：	
提案者	：龍谷フットパスプロジェクト HAT
自治体担当者	：青西豊司
連携大学担当者	：牛尾洋也

１． 取組体制

私たちは、行政や地域団体と協力して地域振興に取り組んでいる。また、行政と地域団体の連携が希薄である場合に、私たちが積極的に介入することによって、連携を強化し地域活性化の役割を担う。さらに、私たちが関係人口の一部となり、地域コミュニティに参加することで、地域活性化が期待できる。なお、当団体は昨年にサークル化した。それによって下級生に引継ぎ、持続的に地域とかかわりを持つことで、長い期間を見据えて成果を上げていきたいと考えている。

【主な連携先】

「木地師のふるさと高松会」、「雪野山の森・里山クラブ」、東近江市環境部森と水政策課、東近江市商工観光部商工労政課、高野自治会、「番場の歴史を知り、明日を考える会」、八日市商工会議所青年部、「滋賀県ウォーキング協会」など多数



２．背景・目的

昨今、過疎化によりインフラ整備が不十分であることや少子高齢化による高齢者の孤立が問題となっている。そこで、滋賀県の東近江市の過疎化が進む地域に焦点を当て、地域団体や行政と協力し地域活性化の取り組みを推進する方針となった。地元を盛り上げたいと考える地域の方々が自発的に地域整備を行う手助けをし、持続的な街を構築していくことを目標としている。具体的には、イギリス発祥のウォーキングである「フットパス」を用いて新しい観光形態でイベントを企画・運営をした。歩くことの健康だけを目的とするのではなく、歩くこと、食べること、対話を通して地域の魅力を滋賀県内外に伝えることを目的としている。また、地域におけるフットパスという言葉の周知や東近江市でのブランド化も図る。

２． 活動内容

主な活動は、フットパスイベントの開催やそのコース作成であるが、そのほかに地域イベントへの参加、手伝い、シンポジウムの開催行っている。また課題解決のために、ヒアリング調査を行ったり、フットパス先進地である熊本県に赴いたりして、自らもフットパスに対する理解を深めている。以下に 2024 年の具体的なイベント内容に関し記す。

(1) 春と秋のフットパスイベントの開催

春に君ヶ畑町と八日市市の太郎坊宮周辺、秋に米原市番場と高野町と八日市市の太郎坊宮付近にてフットパスイベントを開催した。それぞれ地元の団体と協賛し、何度もフットパスコースを歩きの魅力発掘を行った。シビックプライドを向上させ、環境の整備に繋げるため、地域外から来た参加者が発掘した魅力を地元の方に伝える工夫を施した。広報は主にチラシ配布と公式 SNS の呼びかけである。春の太郎坊フットパスイベントでは、老若男女様々な参加者があり、賑わいを見せた。好奇心旺盛な子どもの影響力が大きいことが分かった。秋の高野町を巡るイベントでは過去最高の参加申込者があったが、雨天であったためキャンセルが相次いだ。天候は今後の課題と言える。

(2) 「ほろよいフットパスイベント」の開催

我々は東近江市八日市市のシャッター街が問題となっている商店街に着目した。そこで東近江市役所商工労政課と八日市商工会議所青年部と協賛し、商店街付近の飲食店をはしごする「ほろよいフットパスイベント」を開催することとなった。夏に試験的に市役所、県庁、近江鉄道、コミュニケーションセンターの館長などを招き、意見交換会も含め第一回のイベントを開催した。５人１グループで３店舗周り、お店の間で八日市の観光名所を

巡った。意見交換会での意見やお店の要望を斟酌し、冬に第二回目を開催した。県内だけではなく、県外からも参加者を招き、１グループ５人で２店舗周り、任意参加で忘年会を開催した。忘年会では日程の都合が合わなかったお店の料理を提供したり、ご当地サイダーを出したりした。協賛先との連携は十分行うことが出来たことが本イベントの成功ポイントの１つである。課題としては、予算に対して参加者が少ないことである。さらに、お酒を楽しんでもらうイベントであるため、基本的に都市部から来られる参加者にとっては泊りがけになってしまい、費用がかさむことがネックである。

(3) 「全国フットパスの集い 2024in 美里町」への参加

活動の認知度を高め、対話によるコミュニティ形成を目的とし、フットパスが盛んに行われている美里町で開催される全国大会へ参加した。本大会に参加する中で、イベントを開催する際の企画や広報、運営の仕方についてのノウハウを学んだ。また、新たに同様の目的を持つ団体との協力関係を築くことができた。我々と同様の活動をしている学生と対話する中で、何度も協力先の地域団体を訪問し話し合いを重ねていることが分かった。今後は地域にさらに寄り添い、関係性を強化することが目標としてあげられる。

４．目的の達成状況、成果

東近江市を中心にイベントを何度も開催し、魅力を伝えることができている。単なるフットパスを行うだけではなく、飲み歩きと融合させた「ほろよいフットパス」も新たに実施した。その際、一般参加者を 40 名ほど集客し、多くの地元のお店を紹介することに成功し、地域活性化に貢献した。また、びわこ放送での紹介、地域の広報誌への掲載もあり、我々の活動を周知することができた。

米原市で開催されたイベントは、地元の方々を主催者として開催した。結局、地域活性化を成功させるためには、学生のみがイベントを開催するだけでは効果は薄く、地元の方々の自主的な働きが非常に重要となる。よって地元主催でイベントを開催することができたことは、大きな成果があったといえ、地域活性化に一歩踏み出した。

またその他のイベント開催や地域活動への参加を続けながら、地域活性化に貢献できるように精進する。

５．課題、懸案事項

龍大生が企画、地元の魅力を再発見

「ほろよいフットパス」参加募る

12月7日、八日市駅前周辺

【東近江】 滋賀大学フットパスプロジェクト（滋賀大学法学部の牛尾洋也教授、代表・柴田美怜さん、メンバー20人）は12月7日午後4時30分から、八日市ほんまち商店街付近の飲食店を巡り女性らが八日市の観光スポットを学生らが歩き紹介する（ほろよいフットパス）イベントを開催する。

イギリス発祥のフットパスは、地域を歩くだけでなく、地域住民との交流やイベント参加者が地域との関わりに興味をもち、関係人口へつなげることで、地域コミュニティの活性化に発展させる手法として近年用いられている。

同プロジェクトでは今年5月から5回にわたり永源寺や八日市駅前、太郎坊宮でモニターツアーなどを開催。今回のフットパスツアーは、これまでのツアーを全フッシュアップして企画した。

営業を流し、祭りを盛り上げていた。

職業体験10ブースでは子ども約150人が職業体験に参加、青年部会員がプロの指導者となりそれぞれ達に自身の仕事紹介や、わかりやすく体験ができるように趣向を凝らした内容となっていた。

主催した同青年部赤レジャイ祭り実行委員長の藤田真周さんは「無事に開催出来てホッとしています。より多くのプレゼント参の笑顔が見られて良かったなぁと、青年部メンバーがたくさん参加してくれたお陰です」と話していた。当日は好天にも恵まれ、親子の来場が多く約7十人の来場で祭りが賑わっていた。

青年部会員が指導する職業体験

運営する学生らは、キャンパスのある京都市伏見区に下宿する学生が多く、自分たちの故郷ではない東近江市にこれまでも足を運び地域の魅力を研究してきた。

代表の柴田さんは「フットパスの魅力は、歩くことの健康だけを目的としているのではなく、1つの観光スポットを手軽に巡り見ごろを再発見できるところ。また、地元以外の方がイベントで見つけた新しい魅力を、土地に住み慣れた地元の方に還元することで今まで気づかなかった魅力を知る機会にもなります。私たちは住み慣れた土地の魅力を案外知りません。今回、私たちのイベントに参加することで新しい発見があるのでは。また、皆さんが住む街の魅力を外から来た参加者の方に話して頂き、一緒に街を盛り上げれば思う。（参加をお待ちしております）」と呼びかけている。

当日は、学生らとまち歩きをし、駅前付近飲食店で1店舗45分滞在（各店ドリンク1フード付、ソフトドリンクもあり）で2店舗回る。お店では、まちの見ごろを振り返りながら、交流を深める。受け付けは午後4時15分から、太子ホールで行う。開始は午後4時40分。参加費一人3千円。事前予約が必要で、申し込みは12月3日までに二次元コードから。定員になり次第締め切る。問い合わせは☎080－4497－2152へ。

まちの発祥となった市の守り神をまつる市神神社（八日市本町）を調査する牛尾教授（奥）と学生

家・土地 買売 賃貸!
KAKIYA 不動産
0120-338-336
正社員 & パート 募集
障がいのある方 積極雇用!
ビジネスグリーンホテル八日市 TEL0748-25-0002

１つ目は、フットパスという言葉自体普及できていないことである。滋賀県東近江市と言えばフットパス、と言われるほどのブランド化を目指す。具体的にはイベントに中高生を積極的に招いたり、出前授業をしたりして東近江市の教育にフットパスを組み込むことが挙げられる。

２つ目は、イベントの広報活動に限界を感じていることである。チラシを作成し配布することや公式 SNS に掲載するなどをしても人の目に留まることは限りなく少ない。しかし、協力関係を結んだ他団体での広報は、比較的効果があった。今後はイベントの参加者のニーズに合わせ臨機応変に対応していくとともに、新しい広報先の創出に尽力する。

３つ目は、過疎化が進んでいる地域をイベントの開催地に設定しているため、一般参加者は当然、我々も気軽に訪問することが出来ない。何度も訪問しコースを歩くことで地域の魅力発掘や、地元の方との関係を強化したい。しかし、交通の便が良い地域でイベントを開催するにしても、過疎化が進んでいないため趣旨から外れてしまう。

以上の課題を解決した上で、事業のシステム化をし、次の代に伝えていきたい。

2024 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 14

プロジェクト名（活動テーマ）： 大学生に３つの授業実践力をつけるための子ども向け科学実験・ものづくり教室の取り組み		
SDGs 目標：		
提案者	：	箱家勝規（びわこ学院大学　教授）
自治体担当者	：	久我真平（大津市科学館　指導主事）
連携大学担当者	：	岡崎孝文（びわこ学院大学・地域連携研究支援課　課長）

１．取組体制

（１）びわこ学院大学箱家ゼミの３回生、４回生の学生１１名および２回生の学生４名を中心に「科学館プロジェクトチーム」を結成した。このチームは「わくわくサイエンス」「サイエンス屋台村」「少年少女発明クラブ」「スーパーわくわくサインス」および学生主体事業「びわ学大実験教室」に取り組んできた。

（２）大津市科学館の指導主事と密接に連絡を取り合い、スケジュール調整、成果の確認、課題の洗い出しを行ってきた。

（３）大学内では、活動の意義を話し合い、教材の選択、事前準備、リハーサル、本番、振り返りなどのプロセスを指導教官と学生が共に行ってきた。

２．背景・目的

【背景】小中学校の子どもたちの中には、理科嫌いや理科が苦手という現象が見られる。また、小学校教員の中には、理科の授業を専科の教員に任せている現状がある。このような状況の中、小学校教員を目指す大学生にとっては、理科の知識や技能を高めるだけでなく、理科授業の実践力を向上させることが重要な課題となっている。

【目的】「授業実践力」とは次の３つの力である。①「教材分析力」：使用する教材の特徴やその現象が起こる理由を理解し、子どもたちに何を学ばせたいかを明確にする力である。②「子どもの実態把握力」：目の前の子どもたちが何を知っているか、何に興味を持っているか、何ができて何ができないかを把握する力である。③「授業展開力」：導入で子どもたちの活動意欲を高め、活動中に発言させ、考えさせ、気づかせる工夫をする力のことである。

これら３つの力を大学生にいかに高めていくかが最大の目的である。

３．活動内容

（１）『わくわくサイエンス』:

親子２０組を対象にした科学実験やものづくりである。毎回のタイトルに工夫を凝らし、子どもたちの興味が高まるようにしてきた。また、安全面を一番考慮し、終えたときに「楽しかった。また来たい」「家に帰ってもやってみたい」と言ってもらえることを意識してきた。

①　４月２７日（土）「てかロス」
②　５月１８日（土）「へんしんスライム」
③　６月　１日（土）「ジャンピング・シャボン」
④　７月　６日（土）「つかめる水」
⑤　９月　７日（土）「ゆらゆらどうぶつ」
⑥１０月１２日（土）「とうめいな水が…」
⑦１１月　５日（土）「そらとぶクラゲ」
⑧１２月２１日（土）「もちもちふうせん」
⑨　２月　１日（土）「ストロケ」
⑩　３月　１日（土）「バブルタワー」

（２）『サイエンス屋台村』:

７月１３日(土)大津市科学館最大のイベントで毎年館内全体を使って２０あまりのブースが開設されている。

本チームからは、「－１９６℃の世界」と称して、液体窒素の実験を６回実演し、約４００名の子ども達やその保護者に楽しんでもった。普段なじみのない液体窒素をできるだけ子ども達にも楽しんでもらうため、安全面については最大限注意を払って実施をした。

（３）『びわ学大実験教室』:

科学館入館者を対象に、お盆明けの３日間、１３時から１５時まで、子ども達に科学実験やものづくりを楽しんでもらう本学主催のイベントである。

①８月２０日（火）「水をつかめるか」
②８月２２日（木）「人工イクラ」
③８月２３日（金）「虫よけビーズ」

展示ホールの入館者には「参加したいときに参加でき

る」ようにしたので、３日間とも６０名以上の子どもたちが楽しんだ。

（４）『スーパーわくわくサイエンス』:

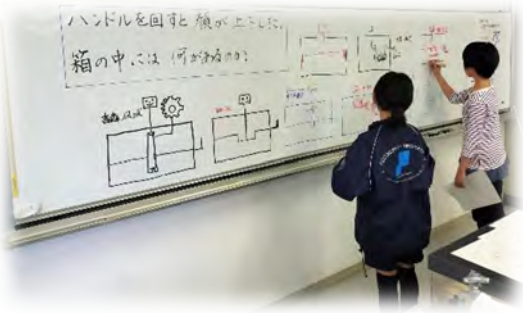
参加応募してきた小学生３６名に対して、９０分間実験やものづくりを通して、科学の面白さ、不思議さを感じてもらうものである。

①９月２１日（土）:『見えてなかったものが見えてくるースピーカー、望遠鏡づくりー』というテーマで実施した。紙コップとエナメル線を使ったスピーカーづくりと１００円均一商品で月が観察できる望遠鏡づくりである。

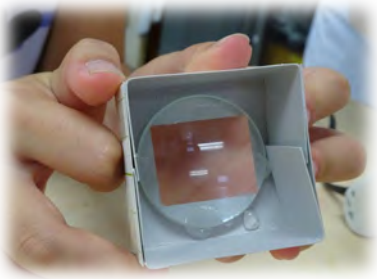
②２月１５日（土）:『理科の本質を探る』というテーマで実施した。理科の勉強はどうしてするか、理科で学んだことがいったい何に役立つのかを一緒に考えるため、「割れにくいシャボン玉、ナスの皮でつくった指示薬、電流モデルの体感、飲み物電池でオルゴールを鳴らす」実験を行った。

（５）『大津少年少女発明クラブ』:

５年生クラスは、「カムを使ったおもちゃづくり」「クランク機構を利用したおもちゃづくり」を年間８回、講師の指導方法や技術を学びながら、学生は子どもたちの手助けに務めた。講師が子どもたちに問いかけたときの柔軟な発想にあふれた答えにはいつも驚かされた。

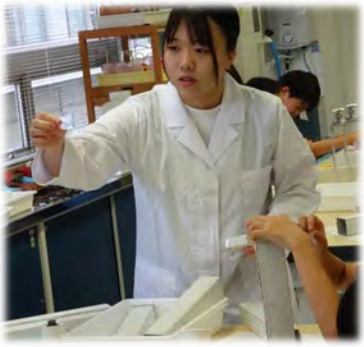


４．目的の達成状況、成果



①「教材分析力」：９月に実施した「スーパーわくわくサイエンス」の「望遠鏡づくり」では、100 円均一の素材を使って、時間内に子どもたちが考えながらつくることができるように計画を立てた。その結果、外からの光が入らないように鏡筒の重なりを密着させるため、折り曲げ線に沿った工作用紙のきれいな折り方や、レンズと工作用紙を素早く接着する方法を見いだした。これにより、限られた時間内に活動を終了できることが分かり、事前準備の教材分析の重要性が再確認できた。限られた時間内に活動が終了できるようにすることは、事前準備としての教材分析がいかにできているかのバロメータにもなった。

②「子どもの実態把握力」：わくわくサイエンスの「バブルタワー」とは、ペットボトルを半分に切り、雑巾を使用して大量の泡を作る実験である。このとき低学年の子どもたちの息を吐く力を考慮し、当初予定していたペーパータオルを雑巾に変更した。大学生は子どもたちの実験を考える際に、どうしても自分たちの基準で判断しがちである。しかし、ものづくりや科学実験をするときには、子どもたちが自分の力でどこまでできるのかを事前に把握しておく必要がある。例えば、厚紙を細かなところまではさみで正確に切ることは小学校低学年では無理である。この活動は低学年にはたしてできるのか、高学年なら学校ですでに習っているのかなど、子どもの実態を把握する力が少しずつついてきたといえる。



③「授業展開力」：教材研究を行い、子どもの実態把握ができても授業展開力が伴わなくては授業として成り立たない。どのような問いかけが適切なのか、指示はわかりやすいか、子どもの発言にどのように返していくのかなど、瞬時に判断して進めていく必要があった。これら多くの活動を通して、子どもたちの自由な発言や予想外の反応にも対応できるようになってきたこと、子どもの安全面について予見できるようになったこと、時間内に子どもが楽しめる様に活動をつくることができたこと、子どもへの説明、指示の言葉を丁寧に考えるようになったことなどが成果である。

特に、演示者がその活動を全力で楽しむことが重要であることがわかった。「びわ学大実験教室」の「人工イクラ」「虫除けビーズ」では、大学生自身が子どもたちと一緒に活動を楽しむ様子が見られた。演示している大学生がとても楽しそうにしていたので、子どもたちは取り組む前からその表情や雰囲気を見て、「とても楽しそう」と伝わっていき、活動への気持ちが自然と盛りあがっていった。

５．課題、懸案事項

１年間を通して多くの活動を行い、そのたびに記録を残してきた。しかし、授業実践力の記録方法については具体的な内容の検討の課題が残っている。また、教材分析力向上のために、各活動が小学校の理科とどのように関連しているかを具体的に言語化し、意識することが求められている。

2024 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 15

プロジェクト名（活動テーマ）：いのちの安全教育　～Stop 性暴力・性犯罪～	
SDGs 目標：	
提案者	：びわこ学院大学　BGU 若鮎隊　4 年生　中村 巴茄、中森 璃莉他 10 名
自治体担当者 連　　絡　　先	：滋賀県　総合企画部　県民活動生活課　主事　山下 達也 ：（電話）077-528-3414　（ファックス）077-528-4840 （ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ）bohan@pref.shiga.lg.jp
連携大学担当者 連　　絡　　先	：びわこ学院大学 子ども学科 教授 内藤 紀代子 ：（電話）0748－22－3388　（ファックス）0748－23－7202 （ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ）k-naito@biwakogakuin.ac.jp びわこ学院大学 地域連携研究支援課 岡崎 孝文 （電話）0748－35－0005　（ファックス）0748－23－7202 （ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ）ex-link@newton.ac.jp

１．取組体制

本活動は、滋賀県 総合企画部 県民活動生活課の指導のもと、おうみ犯罪被害者支援センターや専門員の協力を得て、大学生が文部科学省と内閣府が作成した教材・手引きや、その他の教育媒体を活用して、滋賀県下の子ども達に「いのちの安全教育」を行うもの（図 1）。今年度は滋賀県警サイバー犯罪対策課からもネットや SNS での性犯罪の防止について講義を受け、教育するための知識の幅を広めて活動を行った。

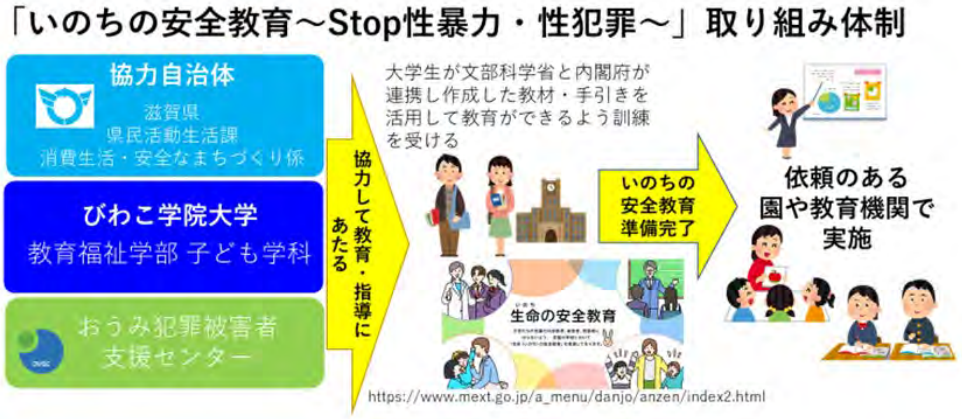


図 1　取組体制の概要

２．背景・目的

令和 5 年の滋賀県警察本部生活安全部の報告によると、性犯罪に関する対象事案は 288 件、子どもと女性に対する前兆事案は 562 件と報告されている。また、低年齢児童の性犯罪前兆事案は 112 件（昨年＋20%）と増加している。滋賀県においても犯罪被害者等のための相談窓口を設け対応を図っている。しかし、予防という視点からすると子ども達への事前の教育が重要となる。

本活動は文部科学省と内閣府が連携し作成した教材・手引きを活用しながら大学生が「いのちの安全教育」を園や教育機関で実施し性犯罪・性暴力の予防を図ることを目的とする。

３．活動内容

本事業の具体的な取り組みは下記の 4 点である。

① 園や教育機関でいのちの安全教育を行うため、大学生が大学教員や専門員、滋賀県担当者から指導や教育を受ける。

② 教育や指導を受けた大学生が、実際の現場で教育ができるよう実践トレーニングを行う。

③ 依頼のあった園や教育機関で大学生がいのちの安全教育を実施する。

④ 実施の評価を行い教育活動のブラッシュアップを行う。

４．目的の達成状況、成果

今年度の目的の達成状況としては、下記のタイムテーブルに従い具体的な取り組み①～②は完結し、③と④に関しても一部実施できた（図 2）。

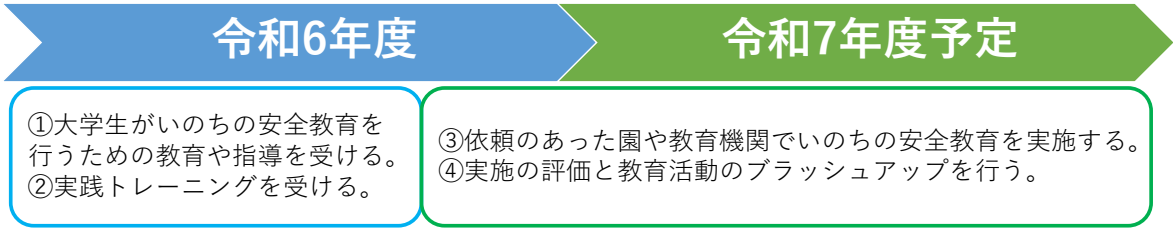


図 2　事業のタイムテーブル

今年度の成果としては、こども園で述べ **57 名**の園児に実施し、さらに、教育機関 8 校で合計 **1058 名**の生徒に、教育活動としていのちの安全教育（性暴力・性犯罪）の出前授業を実施した。また、滋賀県で子どもを笑顔にするイベント「すまいるあくしょんフェスタ 2024」に出展し、いのちありがとう・いのちまもろう（ペープサート）、じぶんだけのだいじなところ（紙芝居）、いかのおすし・はんざい Stop&No（寸劇）を実施し、**こども 57 名・保護者 40 名**に啓発を行った（図 3）。

こども園での教育活動の様子

教育機関での出前授業

すまいるあくしょん
フェスタの様子

令和6年度の成果	
R６年５月２８日	おうみ犯罪被害者支援センターによる講義（性暴力･性犯罪に関しての内容）
R６年６月５日	滋賀県警サイバー犯罪対策課による講義　（ネット･SNSでの性犯罪に関する内容）
R６年６月１０日	教育活動(東近江市内こども園18名）シリーズ①いのちありがとう･いのちまもろう
R６年６月１７日	教育活動(東近江市内こども園20名）シリーズ②じぶんだけのだいじなところ
R６年６月２４日	教育活動(東近江市内こども園19名）シリーズ③いかのおすし･はんざいStop＆No
R６年６月２５日	教育活動(東近江市内中等学校1年生101名)(ライフスキル:性暴力･性犯罪)
R６年７月２日	教育活動(東近江市内中等学校2年生100名)(ライフスキル:性暴力･性犯罪)
R６年７月９日	教育活動(東近江市内中等学校3年生104名)(ライフスキル:性暴力･性犯罪)
R６年７月１１日	教育活動(草津市内高等学校2年生327名）（ライフスキル:性暴力･性犯罪）
R６年７月１２日	教育活動(愛荘町内高等学校2年生90名）　（ライフスキル:性暴力･性犯罪）
R６年８月６日	「なくそう犯罪」滋賀安全なまちづくり実践県民会議で活動の報告
R６年９月２５日	教育活動(東近江市内高等学校1年生170名)（ライフスキル:性暴力･性犯罪）
R6年10月12日	イベント活動　すまいるあくしょんフェスタ（参加者:こども57名、保護者40名)いのちの安全教育:①ペープサート　②紙芝居　③寸劇
R７年１月８日	教育活動(甲賀市内高等学校3年生109名）　（いのちの安全教育:性暴力･性犯罪から身を守ろう）
R７年１月１７日	教育活動(草津市内中学校3年生57名）（性に関する教育:性暴力･性犯罪）

図３　今年度の本事業成果

５．課題、懸案事項

＜課題：解決すべき問題＞

現在、いのちの安全教育活動の出前授業を講義型で行っているが、この形式では受動的な学習となり、子ども達が得た知識を実践につなげられるのかが懸念される。

＜今後の対応＞

① 子ども達が参加して考えることができる授業形式（アクティブラーニングなど）を取り入れる。

② 子どもたちの理解と実践につなげることができるのかを定量的に評価する。

＊評価方法：アンケートや感想、聞き取りなど

＜懸案：前から問題となっていること＞

令和 6 年の滋賀県警察本部生活安全部の報告によると、性犯罪に関する対象事案は 373 件（令和 5 年 288 件)、子どもと女性に対する前兆事案は 565 件（令和 5 年 562 件）と報告され、昨年と比較しても減少傾向にあるとは言えない。社会として性暴力・性犯罪防止の強化が図られる中、依然として性暴力・性犯罪が見られることは本活動にとっても大きな懸案である。

＜今後の対応＞

① 本活動による啓発の続行と他団体との連携によって活動の拡大を図る。次年度は滋賀県警察サイバー犯罪対策課の指導を受ける。

② 本活動に参加する大学生が、いのちの安全教育の普及を今後も継続して行う。

③ 教育現場に、ピアエディケーション（同世代が学び合う学習）効果の理解を深めていただく働きかけを行う。

2024 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1年目）

No. 16

プロジェクト名（活動テーマ）:	スポーツ拠点を中心とした地域防災　～みんなで考える地域の避難所運営～
SDGs 目標：	
提案者	：びわこ学院大学　学長　沖田　行司
自治体担当者	：東近江市文化スポーツ部スポーツ課　北川　史也
連携大学担当者	：びわこ学院大学　スポーツ教育学科　祐末　ひとみ

１．取組体制

びわこ学院大学　スポーツ教育学科の合同ゼミナールにて実施している。全体の企画や提案・コンセプト等は、両ゼミナール指導教員が学生の学びを想定して課題や問いを設定し、全体構想を作成後、各ゼミナールの３回生を中心に進めている。

本プロジェクトを通して、各ゼミナールの特色の学びや専門性が地域や社会とつながっていく実践教育の位置づけで、下記の体制と流れで実施した。

【体制】

指導教員　高木（スポーツ教育学科学科長）　祐末（地域スポーツ担当）
全体運営・プログラム担当　　祐末ゼミ（スポーツマネジメント　等）
専門プログラム担当　　高木ゼミ（スポーツ生理学　等）
会場確保及び関係団体等連絡調整担　　スポーツ課（担当自治体）
プロジェクトアドバイス　　防災危機管理課

【流れ】

１．担当指導教員と打ち合わせ・最終プロジェクト内容の確認及び修正
２．主担当教員と自治体担当者と打ち合わせ
　　地域関係団体への説明会及び協力依頼
３．各ゼミナールに分かれた趣旨説明
　　各ゼミナールの取組み
４．合同活動内容確認　等
　　１年目の提案イベント実施
５．本年度振り返り及び次年度に向けた改善内容検討　等

２．背景・目的

東近江市には、地域住民が主体的に運営する総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）が大小合わせて７つ存在している。これらの総合型クラブは、スポーツ活動を通

じて人と人との交流を深め、地域の組織や団体が互いに連携・協力する互酬性を育む重要な組織であり、総合型クラブが活動拠点としているスポーツ施設や活動場所は、災害や緊急時には避難所として機能する場所でもある。実際に、東日本大震災や熊本地震、能登半島地震などの大規模災害において、本格的な避難所が開設されるまでの間、地域クラブや地域住民が初動の避難所運営の役割を果たしていた事例が多く報告されている。

よって、東近江市においても整備された自治体（行政）による避難所整備に加えて、地域住民が主体的に動ける体制づくりが必要不可欠と考え本提案の着想に至った。

以上の背景を踏まえ、本プロジェクトでは、東近江市において総合型クラブと連携し、災害時の初動対応力を強化することを目指す。具体的には、日常的に活用されているスポーツ施設を中心に、総合型クラブと協働して地域防災の体制づくりを模索していく。

３．活動内容

本プロジェクトの活動内容は、表１に示す。具体的には、地域のスポーツ拠点を活動場所とする総合型クラブ等の関係者を対象とした ①避難所運営がシュミレート出来るプログラムと地域住民が実際に避難所体験を通して、日常の防災準備や被災した際のライフハックを楽しみながら体感する ②避難所体験ができる地域住民向けプログラムの大きく２つで企画している。

表１　活動内容

時間	プログラム名	対象(案)	内容(案)
午前中（2h）	避難所運営ゲーム（HUG)	クラブ関係者 スポーツ推進委員等	各地域に分かれて拠点体育館を想定した HUG の実践と日常避難訓練プログラムの検討
~~昼~~	~~炊き出し①~~	~~クラブ関係者~~ ~~スポーツ推進委員等~~	~~想定された人数分の炊き出しを作る(おにぎり・豚汁)~~
午後（2h） ※同時進行	炊き出し②	地域住民・親子	簡易サバイバル飯を作る（アイラップ/カートンドック)
	避難所体験 健康体操	地域住民	普段着、限られたスペースで出来るストレッチや運動の紹介
	避難所体験 居住空間	地域住民	実際の避難所を想定した空間体験

【計画からの変更】

計画上では、炊き出し①と炊き出し②を分けて準備していたが、午前中の研修プログラム参加者が少人数であったため炊き出し①を非実施とし、午前中の参加者にも炊き出し②の体験をしていただいた。

４．目的の達成状況、成果

本プロジェクトでは、東近江市において総合型クラブと連携し、災害時の初動対応力を強化することを目指した。具体的には、日常的に活用されているスポーツ施設を中心に、総合型クラブと協働して地域防災の体制づくりを模索した。目的の達成度について、企画

の実現性は 70%、実施した事業成果は 85%、参加者満足度は 5 段階中 4.57 点という高評価を得た。参加実数は、午前中の避難所運営ゲーム研修に 4 団体 12 名、午後のプログラムには親子連れを中心に 6 家族＋スポーツ少年団の計 51 名が参加した。午後のプログラムでは、2 つのゼミナールの特色を活かし、学生が主体的に動き、子どもから高齢者まで幅広い参加者層に柔軟に対応できた。特に、小さなお子さんを持つ保護者からは定期開催や、保育園・幼稚園・小学校等での実施希望の声が多く寄せられた。

避難所運営ゲームでは、次年度のブラッシュアップを目的に研修後に参加者の感想を収集した。以下に一部を抜粋する。

【参加者からの感想】
・避難所の受付対応は避難者の不安を和らげるために重要であり、必要に応じて家族や支援者と連携して対応することが求められる。
・混雑や接触を避けるため、受付を複数箇所に分散させるか、逆に一箇所に集約するかの判断が必要。
・ステージや屋内スペースの有効活用を検討し、食事スペースやプライバシー確保エリアを適切に配置する。
・通路や動線を確保し、混雑を防ぐことで安全性を高める。
・自治会長や地域のリーダーを配置し、迅速な意思決定ができる体制を整える。
・地域住民が主体的に考え行動できるよう、平時から防災訓練を実施し、知識と経験を積むことが望ましい。
・災害時は想定外の事態が次々と発生するため、現場で迅速かつ柔軟に判断できる体制が必要。
・必要な物資の備蓄や、避難者が寒さや孤独感を感じないような配慮を行うことが大切。
・すべての要望に対応することは難しいが、その時点で最も必要なことを優先的に考え、適切に対応する姿勢が求められる。

全体的な振り返りとして、実践的なシミュレーションを通じて避難所の運営課題を体験し、参加者から多くの貴重な意見や提案を得ることができた。このことは、今後の継続的な事業運営や地域防災力の向上に資する成果である。また、避難所運営体験プログラムを通じて、参加者には実際の災害発生時に直面する可能性のある課題や、必要な準備について家族や地域住民と深く考える機会を提供できた。

今後は、収集した参加者の意見を反映し、避難所運営ゲームや防災訓練の内容をさらに充実させ、地域全体で災害に強いコミュニティを築くことを目指していく。

５．課題、懸案事項

- 開催時期の検討
- 参加申し込み方法(実施のやり易さを優先して申し込み制にするのか、当日参加にするのか)
- 東近江市との横断的な関わりの検討及び開催自治体との連携
- 学生との課題共有　など

【当日の様子】

1．避難所運営ゲーム

2．簡単防災クッキング

3．避難所体験

4．避難所体操体験(エコノミークラス症候群対策)

2024 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 17

プロジェクト名（活動テーマ）: —ひきこもりや孤独死、育児ノイローゼから人々を救う— 音楽セラピーとリクリエーションによる生涯教育と子育て支援	
SDGs 目標：	
提案者	：びわこ学院大学短期大学部児童学コース　竹下ゼミ
自治体担当者	：東近江市企画部及び東近江市地域振興事業団　上山哲夫
連携大学担当者	：びわこ学院大学短期大学部児童学コース　講師　竹下則子

１．取組体制

◎東近江市企画部及び東近江市地域振興事業団

公益財団法人東近江市地域振興事業団は、東近江市(教育委員会)からの委託を受け、年間約 100 の生涯学習講座を実施している。そのうちの２つが「うたの花束」「親子で楽しむ 0 歳からの音楽会」事業であり、びわこ学院大学短期大学部児童学コース・竹下ゼミと連携して実施した。

◎びわこ学院大学短期大学部児童学コース竹下ゼミ

びわこ学院大学短期大学部児童学コースの竹下ゼミは上記事業団より地域連携講座として依頼を受け、この活動に参加した。

２．背景・目的

人口減少や超高齢化を受けて、ひきこもりや孤独死、育児ノイローゼが問題視されている。これらを防止することを活動目的とし、びわこ学院大学短期大学部、同学生が生涯学習講座（公財東近江市地域振興事業団主催）で学ぶ人々と交流することを通して、人々の地域活動への参加、生きがいづくり、活力ある地域コミュニティの形成、まちづくりに資することにした。

３．活動内容

びわこ学院大学短期大学部が公益財団法人東近江市地域振興事業団と連携して実施している生涯教育の取り組み（「うたの花束」事業）と「親子で楽しむ 0 歳からの音楽会」の事業は、東近江市立「あかねホール」を会場に、呼吸法・発声法の練習、ピアノ伴奏による合唱、楽器演奏、音楽レクリエーション、リトミックなどを通して、地域住民の心身の健康に貢献してきた。

◎『うたの花束』「特集　三線とよし笛の世界」　(高齢者対象事業)

日　時：2024 年 8 月 28 日(水)

開　演：10：00～11：30(9：30 開場)
会　場：東近江市あかね文化ホール(大ホール)(東近江市市子川原町 461 番地 1)

◎『うたの花束』「特集　箏の世界」　(高齢者対象事業)
日　時：2024 年 12 月 18 日(水)
開　演：10：00～11：30(9：30 開場)
会　場：東近江市あかね文化ホール(大ホール)(東近江市市子川原町 461 番地 1)

◎『０歳からの楽しい親子ふれあい音楽教室』
日　時：2024 年 9 月 28 日(土)
開　演：15：00～15：45
会　場：東近江市あかね文化ホール(大ホール)(東近江市市子川原町 461 番地 1)
プログラム　１山の音楽家メドレー　２絵本読み　３親子でバイオリン　４舞台で楽器遊び

◎『０歳からの楽しい親子ふれあい音楽教室』
日　時：2024 年 11 月 20 日(水)
開　演：15：00～15：45
会　場：東近江市あかね文化ホール(大ホール)(東近江市市子川原町 461 番地 1)
監　修：ピアノ弾き歌い奏者　竹下則子(びわこ学院大学びわこ学院大学短期大学部)
プログラム
１ピアノで手遊び　２絵本読み(大型絵本)　３シフォンスカーフ遊び
４クラリネット演奏　５リズム表現遊び　６クラリネット演奏(アンコール)

◎『０歳からの楽しい親子ふれあい音楽教室』
日　時：2024 年 1 月 18 日(土)
開　演：15：00～15：45
会　場：東近江市あかね文化ホール(大ホール)(東近江市市子川原町 461 番地 1)
監　修：ピアノ弾き歌い奏者　竹下則子(びわこ学院大学びわこ学院大学短期大学部)
プログラム
１ピアノで手遊び　２絵本読み(大型絵本)　３シフォンスカーフ遊び
４ユーホニウム演奏　５リズム表現遊び　６ユーホニウム演奏(アンコール)

４．目的の達成状況、成果

⑴「うたの花束」では高齢者の心身の健康や生きがいづくりに貢献することができた。
⑵「親子で楽しむ０歳からの音楽会」では、乳幼児を持つ保護者の子育ての不安を緩和し、音楽コンサートを通して親同士の相互交流、子育ての相談や情報提供などの援助が行える場を提供することができた。また乳幼児は生の演奏に触れることで、集中力や思考力など様々な力が身につくとともに、「感じたことを表現する」機会を持つことができたと推察される。演奏者と直接ふれあい、双方向性も大切にすることで、乳幼児が成長する上での貴

重な経験となった。
⑶大学生においてはリーダーシップの育成、地域住民との関りによるコミュニケーション能力の育成、保護者への相談、支援や援助を行うための保育者としての資質能力の育成、音楽的技術能力の向上などができた。

５．課題、懸案事項

⑴学生の教育実習と演奏会が重なった時の対応などに課題がある。
⑵音楽会の回数が多いと学生の負担が大きい。
⑶音楽会の周知に対して検討する余地がある。

サンドイッチ
サンドイッチ

2024 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 18

プロジェクト名（活動テーマ）： 滋賀県 CO_2 ネットゼロ社会づくりの推進をテーマにした 児童向けワークショップデザインプロジェクト	
SDGs 目標：	
提案者	：成安造形大学　総合領域　非常勤講師　小野真紀子
自治体担当者	：滋賀県・総合企画部 CO_2 ネットゼロ推進課　主任主事　坂口知沙
連携大学担当者	：成安造形大学　未来社会デザイン共創機構　講師　田口真太郎

１．取組体制

成安造形大学総合領域 3 年生：ワークショッププログラムの開発と実施を担当。
滋賀県地球温暖化防止活動推進センター（淡海環境保全財団）、滋賀県 CO2 ネットゼロ推進課：内容監修とサポートを提供。
大津市内の小学校：実施場所を提供し、児童の参加を促進。

２．背景・目的

本助成金事業は、美大の授業で制作した児童向け環境学習教材と体験プログラムを、授業内に留めず実社会で活用できる形に昇華することを目的とした。これにより、成果物が教育現場で実際に役立つものとして展開されることを目指した。

３．活動内容

①ワークショップの改善
〔ワークショップ 1 「南極防衛隊」〕
前提：前期授業期間内の 2024 年 7 月 24 日に、仰木の里東小学校学童クラブ（大津市）の児童を対象にワークショップの実践を行った。1-2 年生 13 名が参加した。
成果：CO2 による海面上昇についての再調査を行い、一度上昇してしまった海面を下げることが非常に困難であることが分かった。この内容をワークショップに盛り込み、「今、私たちが頑張らないといけない」というメッセージ性を強める方向性を得た。このメッセージ性を伝えるために、海面を模して利用していたキューブに工夫を加えるという改善策が出た。
課題： 海面上昇の原因になっているキューブを取り出すことがワークショップの 1 つの要素だが、そのキューブにどのような意味を持たせるのかを検討しなくてはいけなかった。

改善：キューブを CO2 であるとし、海の中から CO2 を取り出そうというストーリーに変更した。また、ボードの中央に小さなパネルを設置。ゴールすると裏返すことができるルールに変更。パネルは、スタート時点では南極が暑くて動物が困っている様子、ゴールで裏返すと動物たちが喜ぶ様子のイラストとした。

実施：11/31 に堅田児童クラブで実践を行った結果、キューブについてのストーリー変更について違和感をもつ子どもはいなかったためこの改善は成功した。中央のパネルの設置により達成感を感じることができたのか、ゴールした時は歓声があがるなどし、とても盛り上がった。右の写真は、堅田児童クラブでの実践の様子である。

〔ワークショップ 2「ワットランプ」〕

前提：前期授業期間内の 2024 年 7 月 24 日に、仰木の里東小学校学童クラブ（大津市）の児童を対象にワークショップの実践を行った。3-6 年生 14 名が参加した。

成果：授業内の実践より、ゲーム性は高いが、最も注目してもらいたい各家電の消費電力についての理解が深まるデザインができていないという課題を持っていた。そこで、カードゲームのルールとカード紙面のデザインを変更し、カードを再度作成する。

課題；小学生にワット数を推測してもらうためのファシリテーションについて、より分かりやすい内容にしなくてはならなかった。

改善：ルールの難しさを解消するため、カードデザイン変更した。また、チームで話し合って消費電力の大きい順にカードを並べてみるというルールに変更した。

実施：11/31 に堅田児童クラブで実践を行った結果、各家電の消費電力について各児童が自分の予想を話すなど、消費電力を中心とした会話が増えた。時間を区切ってゲーム性を高めたことで、すべて正解した子どもたちは腕を上げて「やったー！」という等し、課題は解決された。右の写真は堅田児童クラブでの実践の様子である。

②ワークショップの手順等をまとめる紙面デザイン

成果：デザインについては、当初冊子印刷をする予定であったが、ポケットファイルに変更をすることとした。来年度以降に新しくデザインされたワークショップの案内等も追加できるような仕様にした。右図は冊子の表紙デザインである。

③その他
おうみ子ども未来塾が運営する第１回キッズ職業体験マルシェ「シッガニア」in イオンモール草津（https://www.shigania.jp/event/）への学生の出展調整を行ったが、出展条件と参加希望の学生の条件が合わず、今回は見送りとなった。

４．目的の達成状況、成果
①ワークショップの改善
改善と実践を行い、ワークショップデザインの課題を解決した。滋賀県企画調整課より、2025 年夏の大阪万博へのワットランプ出品の打診を受けている。
②ワークショップの手順等をまとめる紙面デザイン
冊子（ポケットファイルに紙を差し込んだもの）が完成し、現在７つのワークショップを記載している。

５．課題、懸案事項
冊子の配布も予定していたが、至っていない。大津市児童クラブ課に配布協力を要請する必要がある。

2024 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 19

プロジェクト名（活動テーマ）： 幼稚園児との日用品を応用した造形あそびワークショップ	
SDGs 目標：	
提案者	：組織・団体名：成安造形大学 代表者の役職・氏名：芸術学部専任講師　藤井俊治 住所：滋賀県大津市仰木の里東 4-3-1
自治体担当者	：本福寺こども園
連携大学担当者	：田口真太郎

１．取組体制

- 成安造形大学（実施主体）：学生スタッフ（6～8 名）の招集、ワークショップの計画、実施、指導・監督を担当。学生は園児と直接交流し、造形遊びの指導とサポートを行う。
- 本福寺こども園（サポート）：プロジェクトの主要な対象として、年長園児約 80 名が参加。本福寺境内でのワークショップ会場の提供。

２．背景・目的

本研究は、大津市の子ども・子育て支援施策に基づき、大津市堅田地域にある本福寺こども園における造形活動の不足解消を目的としています。R6 年度は 9 月 3 日（火）に本福寺こども園の年長園児約 100 名を対象に、本学の学生とともに紙コップを使用した造形遊びを実施しました。これらの活動を通じて、園児の心身の健全な発達を支援し、協力性と創造性を育むことを目指しました。また、質の高い幼児教育および保健の充実に寄与することを目指しています。さらに、本学の学生がサポーターとして園児を支援する中で、多様な気づきを得ることも期待されます。

３．活動内容

活動は三段階に分けて構成されました。第一段階では、園児が個々に紙コップを積み上げる練習を行い、第二段階ではグループで協力し、より高く積み上げる競争に挑戦しました。最終的な第三段階では、参加者全員で紙コップを重ね、長いへびの形をした作品を制作しました。

４．目的の達成状況、成果

・R6 年度実施時（R6 年 9 月 3 日）のアンケートによる達成状況

●ワークショップを通じて、園児は協働性、コミュニケーション力、創造性を育む機会を得る

【園児の感想】

・みんなで協力してつむのが楽しかった
・壊すのが楽しかった
・片付けが楽しくなった
・みんなですると早くつめることに気がついた
・集中してつくることが大事だと気づいた
・どうすれば高くできるかを考えることができた

【教員の感想】

・紙コップだけで発見や感覚を感じられる事ができ、子どもたちの考え方も広がった
・普段ではできないダイナミックな遊びに喜んでいた
・想像ができないほどの量の紙コップがあり、できるものの大きさがかなり違ったので、楽しさが倍増した
・1 人ひとりが夢中になったり、友だちと協力しあったり生き生きした様子が見られた
・友達の思いや発見を共有する場、子どもが主体的に遊んでいく場があった
・大人も子どもも一緒になって活動できた

●大学生は園児との交流から教育的視点を拡大し、コミュニケーションスキルを向上させる

【大学生の感想】

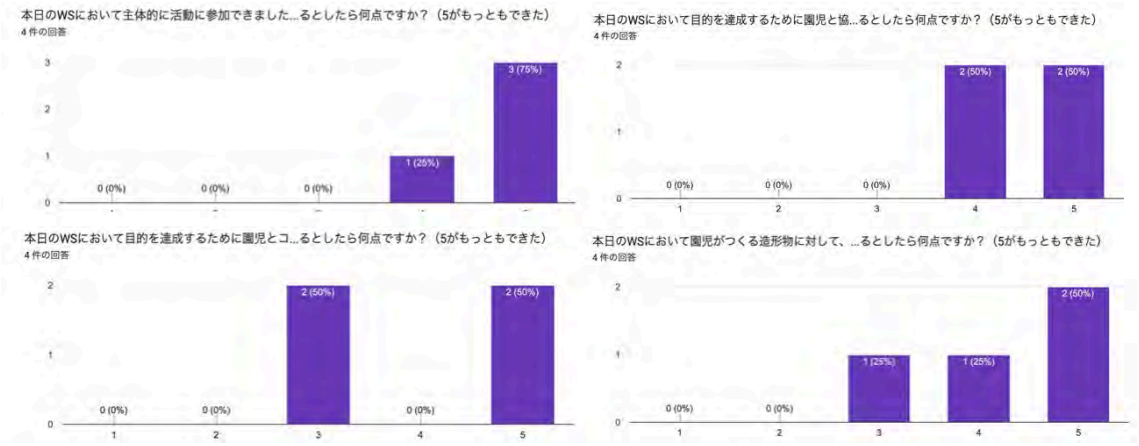
・接し方を意識しながらコミュニケーションを取ることが大切なのだと感じた
・ものの使い方の多様さを学んだ。捉え方によって既存のものをもっと面白く使うことが可能になるんだと感じた
・おもちゃがなくてもその場にあるもので工夫して遊ぶことができるということを学べた

●ワークショップ後のアンケートで、80%以上の園児が「紙コップで遊びたい」と回答することを目標

・挙手による回答で 90%以上の園児が「はい」と答えた。

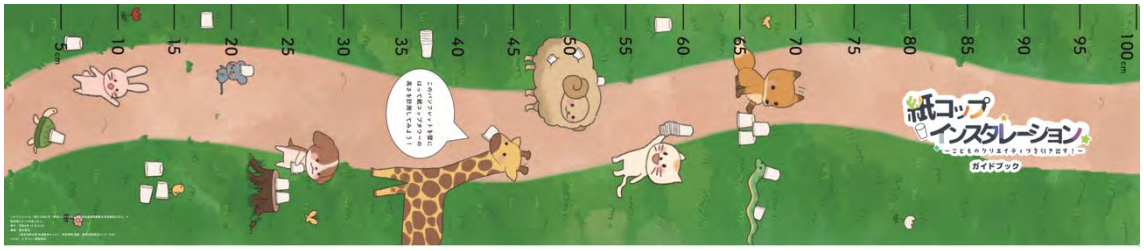
●大学生による自己評価と教員の評価を組み合わせ、教育的視点の拡大やコミュニケーションスキルの向上を定量的に評価

【大学生によるアンケートより】



・ガイドブック制作

本活動をまとめたガイドブックを制作しました。今後、成果を広く共有したいと考えています。



５．課題、懸案事項

園児や教員からの感想およびアンケート結果を蓄積し、それを基に新たな造形活動のアイデアを模索し、実施していきたいと考えています。現状では、

1. 全グループが目標の高さを達成できるような方法論の考案
2. 活動後の鑑賞時間の充実
3. 積み上げ以外の新しい造形内容の模索・導入

の実施を検討しています。

以上